

アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源 (5) ブラック・ナショナリズムの先駆者：デヴィッド・ウォーカー

原 百年

はじめに

デヴィッド・ウォーカー (David Walker) は、1820年代の自由黒人の中で最も急進的で戦闘的な奴隷制度反対論者として知られている。ウォーカーは1829年に出版した彼の著作 *Walker's Appeal, in Four Articles, Together with a Preamble, to the Colored Citizen of the World, but in Particular, and Very Expressly, to Those of the United States of America* (以降 *Appeal* に省略) の中で、奴隷制度を厳しく断罪し、白人たちはこれまでの罪を悔い改めて神と正義に立ち返るべきだと主張した上で、もし奴隷制度が存続するなら神と黒人たちは武器をとりアメリカの「白人を大地から抹殺する」であろうと予告した。極めて暴力的な表現に満ちた彼の著作 *Appeal* は、アメリカ全土に広く流通し、南部の奴隷所有者たちに大きな衝撃を与えると同時に、それを讀んだ (または読み聞かされた) 黒人たちの反抗心をかきたてた。ハイチ革命とアメリカ独立革命から大きなイデオロギー的影響を受け、「黒人の自治」と「ブラック・ネーション」の建設を思い描いたウォーカーは、*Appeal* を出版した1年後にボストンで不慮の死を遂げた。45年の生涯であった。

第1節 ノースカロライナ州ウィルミントン時代

1. 生い立ち

ウォーカーは、1785年9月28日、ノースカロライナ州のウィルミントンで生まれた。父は奴隷黒人だったが、母が自由黒人だったため、ウォーカーは自由黒人として生まれたということになる¹⁾。ヘンリー・ハイランド・ガーネット (Henry Highland Garnet) の 'A Brief Sketch of the Life and Character of David Walker' (1848) によれば、ウォーカーはウィルミントン時代、次のように語っていたという²⁾。

私の同胞が受けてきた悲痛によって私は打ちのめされてしまうだろう。ここは私が居るべき場所ではない。この場所から立ち去るしかない。これほど多くの黒人奴隷がいる同じ土地で生活するなんて、とれも耐えられない。ましてや、奴隷の鎖の音が常に聞こえ、偽善的な奴隷所有者の侮辱行為にいつも遭遇するような場所に留まることなどできな

1) 子どもの身分は、通常、母親の身分によって決まった。すなわち、母親が自由の身分であるなら子どもは自由で、母親が奴隷ならその子どもも奴隷であった。

2) ヘンリー・ハイランド・ガーネットはウォーカーとほぼ同世代人で、過激な反奴隷制度活動家として知られている。ガーネットは、ウォーカーに尊崇の念を抱いていて、ウォーカーが著した *Appeal* を1848年に再版した。'A Brief Sketch of the Life and Character of David Walker' は、その中に収められていたものである。ガーネットは、ウォーカーの妻であるエライザ・パトラー (Eliza Butler) に直接会い、ウォーカーの生い立ちを聞いたという。ここで引用したウォーカーの言葉も、恐らくエライザ夫人から聞いたものであろう。ガーネットは、「奴隷として生きるくらいなら、死んだ方がましだ」と訴え、「暴力に頼ってでも奴隷制度廃止を求めるべき」と主張したパンフレット、*Garnet's Address to the Slaves of the United States* (1848) で知られている。

い。私は、行かなければならない。

1800年頃、ウィルミントンには1134人の黒人がいて、総人口の三分の二を占めていた。その中でたったの19名のみが自由黒人で、ウォーカーはその一人であった (Hinks 2000: xv)。ウォーカーは自由黒人として生活していたが、父親を含めた黒人のほとんどが奴隷として生きていたウィルミントンで、奴隷に限りなく近い環境の中で暮らしていた。「ここは私が居るべき場所ではない。この場所から立ち去るしかない」と語ったのは、ウォーカーが自由黒人で、単に他の奴隷黒人と生活を共有したくなかったからではない。それは、「私の同胞が受けてきた悲痛」を共有し、それをひどく悲しんでいたからである。ウォーカーは、同胞の黒人が奴隷生活に苦しむのを肌身で感じていた。そして、ウォーカー自身は自由黒人であったが、他の奴隷黒人と同じように苦悩していた。だから、「私は、行かなければならない」と考えたのである。ウォーカーは幼少時代から奴隷制度の中で暮らし、ウィルミントン時代からずっとそれを嫌悪していた。

南部の奴隷州では多くの奴隷がプランテーションから逃亡したが、ウィルミントンもそれは同じだった。1790年代、ウィルミントンでは逃亡した奴隷が街から離れた沼地に潜み、武装していくつもの徒党を組んだ。そして近くのプランテーションを襲っては、食糧や家畜を奪い、白人プランターたちの怒りを買った。白人たちがそれらの逃亡奴隷を捕まえたときは、彼らの頭を切断し、長い棒の上に括りつけて、街から少し離れた「ニガー・ヘッド・ポイント」と呼ばれる場所に、それが腐り果ててしまうまで展示したという。もちろんそれは、逃亡奴隷だけでなく、黒人全員に対する警告を意図したものであった (Hinks 2000: xvii-xviii)。ウォーカーも幼少期から青年期にかけて、その「見せしめ」を自分の目で見たであろう。否が応でも、南部の奴隷制度における白人と黒人の関係性、すなわち「残

酷な白人と、彼らによって苦しめられる黒人」という人種間の関係性が、ウォーカーの記憶の中に刷り込まれていったと思われる。

2. 教育に関して

ウォーカーは20代の間、ウィルミントンに住んでいたとされるが、その間に何らかの教育を受けていた。ノースカロライナ州では学校を黒人に解放していなかったため、ウォーカーは学校以外の場所で読み書きを修得した (Hinks 2000: 13)。スタッキーによれば、ウォーカーに読み書きを教えたのは、ノースカロライナで活発に布教活動をしていたクウェーカー教徒たちだという。クウェーカー教徒たちは、黒人の子供たちを集めて週に二回の授業を行い、読み書きができるようになるまで教え続けた (Stuckey 1987: 114)。リチャード・アレンがやはり同じように、宣教師たちから読み書きを習ったということを考えると、スタッキーのこの仮説はある一定の説得力がある。しかし、ヒンクスによれば、ウォーカーが読み書きを習ったのはクウェーカーからではなく、メソヂストからであった。ノースカロライナ州では、クウェーカー、バプティスト、メソヂストなどのプロテスタント系宣教師が何らかの形で黒人に教育を提供していたが、ウィルミントンでは特にメソヂストが黒人の教育に熱心に取り組んでいた。当然のことながら、黒人たちに読み書きを教える目的は、聖書を読めるようにし、彼らを熱心なキリスト教徒にすることであった。(Hinks 1997: 14)。ウォーカーがウィルミントン時代にメソヂスト教会のメンバーだったことを考えると (Hinks 1997: 18)、ウォーカーが読み書きを教わったのはメソヂストからであったと考えるのが自然である。リチャード・アレンがメソヂストの宣教師から読み書きを学ぶ一方、他方で聖書や伝道集会を通じて「自由」というイデオロギーに目覚めたことは前著で述べたとおりであるが、恐らくウォーカーも同じように白人宣教

師を通じて「自由」というイデオロギーに接した可能性は高い。

いずれにしても、ウォーカーはボストンに移住する1825年のはるか以前から、読み書きができたことは間違いない。なぜなら、ボストンに移住した4年後に出版されたパンフレットである *Appeal* が82ページにも及ぶ長編であるだけでなく、それを一読すれば分かることだが、ウォーカーが歴史に関する書物を多く読み、ジェファーソンの『ヴァージニア覚え書』のような同時代の書物や、アメリカ独立宣言から言葉を引用していることかわも分かるように、それらを自在に読みこなしていたことが明らかだからである。例えば、ウォーカーは *Appeal* の中でオリヴァー・ゴルドスミスの *The Grecian History, From the Earliest State, to the Death of Alexander the Great* (1818) を引いて、古代スパルタ人が戦争に勝利した結果、その戦争捕虜をヘロット（古代スパルタの農奴）として所有した歴史を挙げている。ウォーカーは、ヘロットは少なくともスパルタ人に戦いを挑み、敗北した結果奴隷となったということを述べた上で、「わたしは長いあいだ史書をあさって、われわれの先祖が『アメリカの白人クリスチャンども』に、いったい何をしたためにあのような復讐をうけなければならなかったのか、またわれわれとその子供たちもうけなければならないのか、という理由を探しもとめた」と述べている (Walker 1975 [1829]: 48)。要するに、ここでウォーカーが主張したかったのは、ヘロットが奴隷になったのはスパルタ人に戦いを挑んだからであり、アメリカの黒人が白人に対して何の危害も加えていないにも関わらず奴隷にされたのは不当であるということであった。ウォーカーのそのような結論は、古代ギリシャに関する書物や「歴史家の書物を何年も」読んだ結果、導き出されたものであった。スタッキーがそう主張したように、ウォーカーが20代までに読み書き能力を得ていたことは間違いなさそうである。そして少なくともボストンに移住する以前に、様々な種類の書物を大量に読み、知識を蓄

積していたと思われる。

3. キリスト教徒として

ウォーカーは、ウィルミントン時代に既に熱心なキリスト教徒になっていた (Stuckey 1987: 128)。リチャード・アレンと全く同じように、キリスト教の布教活動によってウォーカーは読み書きを修得する一方、他方で熱心なキリスト教徒 (メソヂスト) にもなったのである。ただし、アレンがいた中部のデラウェアやフィラデルフィアと異なり、ウィルミンントンのメソヂスト教会は白人から「奴隷の教会」(nigger's church) と呼ばれるほど、信徒のほとんどが黒人によって占められていた。これは単に南部地域における黒人人口の比率がフィラデルフィアなどの中部・北部地域よりはるかに高かったということもあるが、メソヂスト教会が熱心に黒人を教会組織に取り込もうとしていた結果だとも言える。ウィルミンントンのメソヂスト教会は、白人住民の反発を受けながら、白人牧師のウィリアム・メレディス (William Meredith) によって1797年12月に設立され、1803年には878人の黒人信徒と「わずかな白人」を擁する教会に成長した。すでに述べたとおりウォーカーはこのメソヂスト教会のメンバーで、聖書を使った読み書きの修得だけでなく、キリスト教の教えを自分のものとしていった (Hinks 1997: 18)。ウォーカーの *Appeal* は序文と4つの論説によって構成されているが、そのひとつは *Our Wretchedness in Consequence of the Preachers of the Religion of Jesus Christ* (Article III) で、そのタイトルに示されているように、キリスト教と白人牧師が黒人たちに与えた影響を詳しく述べている。同じキリスト教徒である白人牧師たちの偽善と蛮行を告発したその論説は、ウィルミントン時代から熱心なキリスト教徒として生きたウォーカーだからこそ、著されたものであると言えよう。

4. 南部の黒人との一体感

ウォーカーは自由黒人であったが、奴隷黒人と接触する機会は多かった。ウィルミントンでは、奴隷黒人たちは白人たちが経営する商店の店番をしたり、逆に白人所有者の「お使い」をしたりするために、頻繁に市場に来ていた (Stuckey 1987: 115)。また、黒人たちは自由か奴隷かに関係なく、週末になると街の通りに出て賑わっていた。特にクリスマスや独立記念日のような祝日には、黒人たちは、白人たちの祝い方とはまったく異なった、「アフリカ的な」かたちで、祭りをとり行っていた。例えば、「巨大な鼻、歯をむき出しにした口、角、髭がついた恐ろしいげなマスクをつけて叫び」、「牛の肋骨でつくった棒をカタカタと鳴らす」といったことをして、大騒ぎした。スタッキーによれば、奴隷黒人たちはプランテーションでも「アフリカ的」な音楽やダンスで夜な夜な楽しみ、自由黒人の家では奴隷黒人も参加してパーティーを開いた (Stuckey 1987: 119-121)。父親が奴隷黒人だったということもあり、ウィルミントン時代、ウォーカー自身がこれらの活動に参加して楽しんだという可能性は高く、多かれ少なかれ、奴隷黒人たちと交流していたことは確かであろう。また、そのメンバーのほとんどが奴隷黒人だったメソヂスト教会を通じて、奴隷黒人たちと交流し、彼らの生活習慣や文化に慣れ親しんでいたことは間違いない (Hinks 1997: 20)。ウォーカーは、*Appeal* の中で常に奴隷黒人を「私の同胞」(my brethren) と呼び、彼らと一体であることを示しているが、そのような一体感は、幼少期と青年期を過ごしたウィルミントン時代から培われていったものだと考えられる。

第2節 チャールストン時代

1. チャールストンという街

1815年から1820年ころ、すなわち30歳から35歳のころ、ウォーカーは生まれ故郷であるウィルミントン（ノースカロライナ州）を離れ、サウスカロライナ州のチャールストンへ移住した。ヒンクスによれば、ウォーカーがチャールストンに移住したのは、ウィルミントンよりはるかに多くの自由黒人がいて、多くの「黒人組織」が存在し、自由黒人のための仕事のチャンスが沢山あったからである（Hinks 2000: xx）。1790年から1820年にかけて、チャールストンの自由黒人の人口は約4倍になり、950人から3615人へと増加していた。1790年代の増加は、ハイチ革命の影響で亡命してきた黒人（ムラートで自由の身分）たちが移住してきたことに由来する³⁾。1800年から1820年にかけての増加は、周辺の南部諸州から自由黒人たちが「より良い暮らし」を求めて移住してきた結果であった（Hinks 1997: 22-23）。ウォーカーはその一人だったということになる。1790年の時点で、チャールストンの白人人口は15,402人で、黒人人口は51,585人（その内、自由黒人が950名で残りは奴隷）だった。約22.5%が白人、1.5%が自由黒人、約76%が奴隷黒人という割合になる。全人口の4分の3が奴隷黒人ということは、ウィルミントン（3分の2）より奴隷黒人の割合が高かったことになる。まさに、マイノリティーの白人が、圧倒的マジョリティの奴隷黒人を支配しているかたちになる。この状況は、もともと黒人の数が多くなかった上、1790年代には暫時奴隷制を廃止していった

3) ここでいう「ムラート」は、白人のフランス人と黒人（多くは奴隷）の間に生まれた混血で、「自由黒人」としてハイチからチャールストンに逃れてきた人々である。

中部と北部の諸州と大きく異なる。

チャールストンの自由黒人は、さまざまな「黒人組織」を設立し、ネットワークを築いていった。例えば、ハイチから亡命してきた黒人たちが1790年に設立した the Brown Fellowship Society は、経済的に困窮しているメンバーに資金援助したり、子どもたちに教育機会を提供したりした。その他にも、ウォーカーが移住する以前に、the Society of the Free Dark Men of Color, the Humane and Friendly Society, the Minors Moralist Society, the Friendly Union などの「黒人組織」が既に存在した (Hinks 1997: 23-24)。いずれの組織も自由黒人のための「互助組織」で、経済、教育、葬儀、祝事等の活動において、自由黒人が互いに支え合う義務と責任を負い、そしてそのような支援を受ける権利を担保するためのものであった。これらの「黒人組織」の内部で自由黒人の間の緊密なネットワークが築かれていったことはもちろんであるが、白人が支配する社会の中で自分たちの身の安全を確保し、暮らしの向上を図る上で、それぞれ異なる黒人組織同士が互いにコンタクトして情報を交換し、ゆるやかなネットワークを築いていったであろうことは、容易に想像できる⁴⁾。ウォーカーも、何らかのかたちでその「黒人ネットワーク」の中に身を置き、黒人コミュニティの諸活動に参加していたものと思われる。ウォーカーがウィルミントンからチャールストンに移住した理由は、より良い仕事にありつくことその他に、このような黒人の互助組織が豊富にあったということが関係していると思われる。

4) かなり有効な黒人ネットワークがチャールストンに存在したことは「ヴィシーの乱」で証明されたといえよう。「ヴィシーに乱」については後ほど詳しく述べることにする。

2. AME 教会の影響

チャールストンに移住して、より劇的なかたちで「自由と平等」のイデオロギーをウォーカーに吹き込み、彼の人生を「過激な黒人活動家」のそれに向かわせる契機となったのは、AME 教会との出会いと「デンマーク・ヴィシーの乱」の経験であった。ここで言及している AME 教会とは、リチャード・アレンがフィラデルフィアで1816年に設立した AME 教会の、チャールストン支部のことである (Hinks 2000: xx)。チャールストン AME 教会は、モリス・ブラウン (Morris Brown) を中心とする黒人リーダーたちが1817年に設立したものである。ウィルミントン時代にウォーカーが所属した教会がメソヂスト教会だったこともあり、恐らくその流れでメソヂスト系教会に通うようになったのであろう。ただし、ウォーカーが AME 教会に通うようになったのは、創始者のリチャード・アレンに強い尊崇の念を抱いたということが強く影響している。*Appeal* の中で、ウォーカーはアレンについて次のように述べている (Walker 1975 [1829]: 91)。

リチャード・アレン！ おおわが神よ！ この人物の働きと、あまりにも惨めな兄弟たち（白人どもによってそのようにされたのだが）のための奉仕を思い出すだけでも、アディソンの筆致を必要とするほどの激情がわたしの魂を満たすのだ⁵⁾。

5) この引用の中に出てくる「アディソン (Addison)」は、ジョゼフ・アディソン (Joseph Addison, 1672-1719) のことを指していると思われる。アディソンは、エッセイスト、詩人、劇作家として有名なイギリス人である。ウォーカーがアディソンの名前を出したことは、彼が歴史書や政治的文書だけでなく、イギリス文学などの書物も幅広く読んでいたことを示している。

前節で述べたように、アレンは、白人キリスト教徒たち自らが説いた「自由と平等」を、聖ジョージ教会（白人教会）で黒人たちにも与えるように要求した。しかし、白人キリスト教徒たちはそれを拒否し、黒人たちを隔離しようとした。ゆえに、アレンは白人教会から分離し、「黒人初の教会」である AME 教会を設立するに至った。アレンによる数々の「兄弟たちのための奉仕」をウォーカーがいつ知ったのか、それを知るすべはないが、チャールストン AME 教会を通じて、アレンが聖ジョージ教会から「ウォーク・アウト」した事件や、白人のメソヂスト教会から独立して AME 教会を設立した彼の偉業に包含される「自由と平等」のイデオロギーが、ウォーカーの心を捉えていことは間違いない。

AME 教会を創設したアレンら黒人キリスト教徒たちは、白人キリスト教徒たちが、キリスト教徒であるにもかかわらず、黒人たちの自由を抑圧したことが許せなかった。なぜなら、彼らは「黒人の自由は神から平等に与えられたもの」と考えていたからである。ウォーカーも同じように考えた (Walker 1975 [1829]: 46)。

われわれが、法的権利のために戦うべき敵の数を恐れることはない。その権利は我々の創造主が保証しておられるのだ。神が今も、そしてこれからもわれわれとともにいて下さるのになぜ恐れる必要があるのか。

ここでウォーカーがいう「法的権利」とは、まぎれもなく「自由と平等の権利」であり、それは神によって保証されているものである。ゆえに、「法的権利のために戦うべき敵」である白人の数がどれだけいようと、神の力をもってすれば恐れることはないのだ。ウォーカーがこのように「黒人の自由と平等」を「権利」として強く意識し始めたのは、少なくとも

も部分的には、チャールストン AME 教会でアレンの「偉業」に触れ、それに強く共鳴した結果であろう。AME 教会は「黒人たちの権利」を具現化する黒人組織として設立されたものである。ウォーカーはそれに通うようになり、「黒人たちの自由と平等」に関する権利意識を高めたのだ。

3. デンマーク・ヴィシーの乱

ウォーカーの *Appeal* はその「反乱の精神」と「革命的」な訴えが特徴的だが、それらの志向は、少なくとも部分的には、チャールストン AME 教会のメンバー、より具体的にはデンマーク・ヴィシー (Denmark Vesey) を通じて得たものと思われる。ヴィシーは「デンマーク・ヴィシーの乱」を計画した人物として知られているが、ヴィシーを含めた首謀者の多くが、他にもないこの AME 教会のメンバーだったのである。未遂に終わったとはいえ、約9,000人も黒人が計画に関係し、35人が絞首刑に処せられ、31人が州外に追放されたとされるデンマーク・ヴィシーの乱は、「アメリカ最大の黒人の反乱」とも言われる (Jaynes 2005: 853-854)。この計画にウォーカーが直接関係していたという記録は残っていないが (関係していたとしても、処罰を逃れるために関係を否定していたであろう)、少なくともヴィシーの考えや計画の情報はウォーカーの耳に入っていたに違いない。いずれにしても、南部諸州を震撼させたデンマーク・ヴィシーの乱は、間違いなくウォーカーに多大な影響を与えたと思われる。

1817年に設立されたチャールストン AME 教会は、多くの奴隷黒人を取り込みながら、同年にすぐさま4,367人のメンバーを獲得した。1800年ころの白人人口が約19,000人だったというから、チャールストンの白人たちにとってそれは相当な勢力に見えたであろう (Robertson 1999: 46)。例えば、地元新聞 *Charleston Times* は、AME 教会について「ほとんど毎晩、騒がしくて狂気に満ちた信者たちが集まって集会を開いている…。し

かも真夜中にである！」と報じ、その活動を問題視した (Robertson 1999: 49)。ヴァージニア州のリッチモンドで1800年に起きた「ガブリエルの乱」に象徴されるように、南部諸州では奴隷黒人による反乱が定期的に発生していたから、南部の白人たちは黒人たちが集まって何かを始めると警戒した。結局、1817年12月にチャールストン市警は AME 教会に立ち入り、「騒乱行為」(disorderly conduct) の罪で469人の黒人信者を逮捕するに至った。その後 AME 教会は市警からの圧力に屈せず活動を続けたため、さらに翌年の1818年6月、再度市警に踏み込まれ、143人の逮捕者をだした。そして今度は監督が禁固一カ月の刑、牧師たちは「鞭打ち10回の刑」に処せられた (Robertson 1999: 50-51)。黒人のみをそのメンバーとする AME 教会は、「黒人の自由と平等」を求めるだけでなく、黒人としてのポジティブな自己表現と黒人コミュニティの発展を象徴するような黒人組織であった。そのような組織が市当局によって容赦なく攻撃されたことが、そのメンバーを急進化させていったことは間違いない。ウォーカーがチャールストンに移り住み、AME 教会に通い出したのがこの時期であるとされるから、ウォーカーも心中も穏やかではいられなかったに違いない。

ヴィシーは、恐らくこの「鞭打ちの刑」を受けた一人であった。なぜなら、ヴィシーは AME 教会設立の立役者のひとりで、牧師として任命されていたからである (Robertson 1999: 50; Jaynes 2005: 853)。ヴィシーは懸命に聖書を勉強し、奴隷制度がいかに聖書の教えに反するかを証明しようとしていた。そして聖書の「エクソダス」のことは引用しながら、どのようにしてイスラエルの子らがエジプトでの奴隷生活から脱したかを、奴隷黒人たちに読んで聞かせた。また、反乱を予言するかのように、「町にあるものは、男も、女も、若い者も、老いた者も、また牛、羊、ろばをも、ことごとくつるぎにかけて滅ぼした」と記されている「ヨシュア記

(6:21)」の言葉を好んで引用した。ヴィシーは、1817年から1818年にかけては AME 教会で、その後市当局が教会の監視を強めてからは自宅で、奴隷黒人たちを集めては聖書を読み聞かせた (Robertson 1999: 47-48)。チャールストン市警による1818年の2度目の手入力で急進化したヴィシーは、その後4年間をかけて、チャールストンだけでなく近隣の街にまで足を運んで、反乱のためのネットワークを築いていくことになる。

ヴィシーが特に足を運んだのは、チャールストン市街から北へ40マイルほどいったサンティー・リバー (Santee River) と呼ばれるプランテーション地域であった。サンティー・リバーは「フレンチ・サンティー」と呼ばれ、ハイチ革命の際、難民化した白人のフランス人プランターが多く移住してプランテーションを開いた地域であった。白人のフランス人プランターは、ハイチの彼らのプランテーションで働いていた奴隷と一緒に連れてきたため、サンティー・リバーには「フレンチ・ニグロ」と呼ばれる大勢の奴隷黒人が住んでいた。ヴィシーは、1818年から1822年まで、そこに通い続けた (Robertson 1999: 52)。海運業を営んでいた白人所有者、ジョセフ・ヴィシー船長の奴隷だったヴィシーは、西インドのバルバドス島生まれで、10代の間ハイチのプランテーションで奴隷生活を送っていた (Jaynes 2005: 853)⁶⁾。流暢なフランス語を話したであろうヴィシーが、ハイチ出身の「フレンチ・ニグロ」たちとハイチ革命について語り合ったということは、容易に想像できる。そこで、フランス革命やハイチ革命に包含される「自由と平等」、または「ピープルの主権」といったイデオロギーが、強烈なインパクトをもってヴィシーの頭の中に入っていたとし

6) ヴィシーはジョセフ・ヴィシー船長とともにチャールストンへ来て、そこで奴隷生活を送ったが、1800年、たまたま買った宝くじで1500ドルを獲得し、自身の奴隷の身分を買い上げ、自由になった。そしてその後、大工の親方となり、経済的に成功した (Jaynes 2005: 853)。

ても不思議ではない⁷⁾。

ヴィシーは、反乱の協力者を得る活動を行う中で、「反乱さえ起こせば、ハイチの政府がきっとアメリカの奴隷を支援するために黒人の軍隊を送り込んでくるであろう。もしくは、反乱に参加した全ての黒人は、白人の奴隷所有者たちを殺してチャールストンを攻め落とした後、ハイチかアフリカへ脱出することができる」と触れ込んでいたという (Robertson 1999: 52)。ヴィシーが実際にハイチ政府と連絡を取り合っていたとは考えにくい。しかし、ハイチ革命において実際に黒人のハイチ軍がフランス軍を破ったという事実は、ヴィシーと彼の支持者たちに大きなインスピレーションを与え、勇気づけたに違いない。サンティー・リバーの「フレンチ・ニグロ」たちにとって、ヴィシーはハイチ革命を成功に導いたトゥーサン・ルーヴェルチュール将軍をイメージさせたであろうし、AME 教会の黒人信者たちには「エクソダス」を導いた預言者モーゼのように映ったかもしれない。いずれにしても、ハイチ革命の精神と聖書中の「エクソダス」の物語を融合させ、約9000人も協力者を得たヴィシーは、黒人たちにとってある種の「救世主」のような存在に映ったであろう。

ヴィシーは、協力者をリクルートする上で、AME 教会のネットワークを駆使した。実際、絞首刑に処せられた35人の内、16人が AME 教会のメンバーだったというから、反乱を企てる上でヴィシーがどれだけ AME 教

7) 奴隷制度反対の反乱について、本田創造も次のように国際的な影響を指摘している。「奴隷制度反対の、さまざまなおききは、当時の国際情勢の変化によっても、大いに促進された。ヨーロッパではフランス革命の嵐が吹きまくり、アメリカとは目と鼻のあいだにあったハイチでは奴隷革命が成功して、1803年には、ついに黒人共和国が誕生した。このハイチにおける革命の成功は、その後のラテン・アメリカ諸国を席卷した植民地解放闘争の突破口になったが、ここで注意しておきたいのは、じつは、これらの国際情勢の変化にアメリカ独立革命が直接間接に刺戟をあたえていたということで、当時の奴隷制度反対の動きは相互に国際的な慣例をもつものであったということである」(本田 1964: 64)。筆者もこの考えに同意する。

会の人的ネットワークに依存していたかが分かる。ヒンクスもそういうように、同じ教会のメンバーだったウォーカーがこの一連の流れの中に身を置いていた可能性は極めて高い (Hinks 2000: xxi)。反乱は未遂に終わったとはいえ、「ハイチ革命」や「デンマーク・ヴィシーの乱」の「反乱の精神」がウォーカーのその後の人生に与えた影響は計り知れない。ウォーカーの急進化した考えは、*Appeal* の中にも如実に表れている。

白人は奴隷を欲し、わたしどもが彼らの奴隷になることを望んでいる。しかし彼らのある者は、彼らがかつてわれわれを見たその日を呪うであろう。太陽が常に正午にその輝きの絶頂に達することがまちがいないように、わが黒人たちは彼らのある者を地上から根絶してしまうのだ。(Walker 1975 [1829]: 54)

「黒人たちは彼ら（白人）のある者を地上から根絶してしまうのだ」という同じ言い回しは、*Appeal* の後半で再度述べられていることから (Walker 1975 [1829]: 103)、ウォーカーとしては強調しておきたかったことであろう。「地上から白人を根絶する」(root out) ということの意味は、白人を「抹殺する」ということであり、かなり過激な発言であるといえる。

そして黒人たちは、そうすることに関して恐れることはないとウォーカーは断言する。

黒人たちに勇気を与えることができれば、1人の有能な黒人の男が6人の白人を殺すことができる。これが事実なのだ。12人の黒人に、戦いのためのよい準備をさせよう。そうすれば彼らは50人の白人を殺し、敗走させることができる。もしあなた方が彼らを動かせば、彼らは死

をさえいとわないからだ。(Walker 1975 [1829]: 59)

奴隷制度や白人たちの横暴な行為を非難し、ここまで戦闘的な表現をつかって「戦う意思」を表明した黒人の著作は、かつて存在したことがなかった。「白人たちの圧制に屈するくらいなら、死ぬことになるとしても戦うことを選ぶ」というこの「反乱の精神」は、チャールストンで経験したデンマーク・ヴィシーの乱から多大な影響を受けながら培われたものであろう。

チャールストン AME 教会は、リチャード・アレンの「バテル教会」(AME 教会本部)で表象された「自由・平等」のイデオロギーを鮮明に反映させ、それをウォーカーに吹き込んだ。そしてハイチ革命から影響を受けて起されたデンマーク・ヴィシーの乱は、「暴力的反乱の精神」をウォーカーに吹き込んだ。デンマーク・ヴィシーの乱が発覚し、関係した黒人たちがチャールストン当局によって厳罰に処せられると、「反乱者の温床になる」として AME 教会自体にも弾圧が加えられた。結局、監督をつとめたモリス・ブラウンを始め教会関係の多くは「州外追放」の処罰を受け、自由黒人の信者も自発的に州外へ逃れていった。ヒンクスによれば、ウォーカーはそのひとりであった可能性が高い⁸⁾。チャールストン当局がにらんだ通り、AME 教会は実際に「自由と平等」のイデオロギーを黒人たちに広め、黒人たちの「暴力的反乱精神の温床」になったのである。

「デンマーク・ヴィシーの乱」以降、ウォーカーはチャールストンを出て、数年間南部諸州を放浪する。ヒンクスによれば、ウォーカーは、ジョ

8) モリス・ブラウンらの AME 教会の指導者たちは、チャールストンを追放された後、フィラデルフィアの AME 教会に助けを求め、リチャード・アレンはそれに快く応じている。ウォーカーがフィラデルフィアに立ち寄った際も、アレンと面会している可能性は高い (Newman 2008: 243-244)。

ージア州、アラバマ州、ミシシッピ州、ケンタッキー州などの南部を放浪し、中部のフィラデルフィアに一時立ち寄った後、1825年にボストンに定住した (Hinks 2000: xxii)。南部での放浪の旅で見た「黒人の苦難」は、相当ウォーカーの心に残ったようで、*Appeal* の序章の冒頭で次のように述べている。

わたしはアメリカ合衆国のかんりの部分を旅行し、その旅行中に現状についてのきわめて正確な観察をした。その観察の結果は、われわれアメリカ合衆国の黒人が、この世界が始まって以来の最もみじめで悲惨な存在であるという、わたしの確信が正しいことを確証した (Walker 1975 [1829]: 35)。

チャールストンでデンマーク・ヴィシーの乱とその後の弾圧を目の当たりにし、逃れるように南部に放浪の旅に出たウォーカーは、南部全体の奴隷黒人たちがこの上なく「虐げられ、不幸で、みじめな存在」として生きていることを自分の目で見てきた。恐らく、この南部での旅によって、より包括的な「我々、アメリカの黒人」という意識を持つようになったに違いない。南部の奴隷黒人と自己を同一視し、「黒人全体」の解放を強く望むようになったのは、北部のボストンに移住する以前に南部諸州を旅してまわった経験が影響していると思われる。

1825年にボストンに移住すると、ウォーカーは古着屋の店を構えて、生活を安定させる。翌年には、ボストン出身の自由黒人、エリザ・バトラーと結婚もする (Hinks 2000: xxiii)。そのように生活の基盤を固める一方、他方でウォーカーは「自由と平等」のイデオロギーおよび「反乱の精神」を強く意識しつつ、数年の間にボストンの黒人社会の中で傑出した活動家として頭角を現すようになるのである。

第3節 「黒人組織」での活躍と高まる「権利意識」

1. 黒人メソヂスト教会

ボストンに移住すると、ウォーカーは様々な「黒人組織」に加入した。それにより、ウォーカーは、「自由と平等」に関する黒人全体としての「権利意識」をますます強めていくことになる。まず、1826年、ボストンの黒人メソヂスト教会のメンバーになった。当該教会は、反奴隷制度を明確に掲げていたサムエル・スノーデン (Samuel Snowden) 牧師によって設立された黒人教会で、後にウィリアム・ロイド・ガリソン (William Lloyd Garrison) と協力関係を築き、奴隷制度廃止運動を牽引したことで知られている (Hinks 2000: xxiii)⁹⁾。ウォーカーは、そのような背景をもつ黒人教会だったからこそ、そのメンバーになったのであろう。サムエル・スノーデンとはすぐに盟友になったというから (Hinks 2000: xxiii)、この黒人教会を通じて、奴隷制度反対の意識を更に強めていったことが容易に想像される。

9) ガリソンは、白人ジャーナリストおよび社会改革者で、過激な奴隷制度廃止運動家として知られている。ガリソンは、黒人活動家フレデリック・ダグラスと共に、急進的な奴隷制度廃止運動の新聞 *Liberator* を1831年に発刊し、「アメリカ反奴隷制度協会」 (the American Anti-Slavery Society) を1933年に創設した。「奴隷の即時解放」を求め続け、1854年7月4日の独立記念日の式典で、大勢の聴衆を前にして「奴隷制度を温存させているのは合衆国憲法である」として、合衆国憲法と「逃亡奴隷法」のコピーを燃やし、聴衆が驚く中で 'No Compromise With Slavery' と題するスピーチをしたことで有名である (Thompson 2004: 230)。 *Liberator* の発行やアメリカ反奴隷制度協会の活動が、アンテバラム期の黒人活動家たちに与えたイデオロギ的インスピレーションは計り知れない。ただ時代的にはウォーカーより少しあとに出て来た人物なので、ウォーカー自身に対する影響はほとんどなかったと思われる。

2. 「フリカン・ロッジ No. 1」

黒人のメソヂスト教会に入会した同じ年に、ウォーカーは「アフリカン・ロッジ No. 1」のメンバーにもなった (Hinks 1997: 70)。その黒人組織は、メソヂストの牧師で貿易商のプリンス・ホールによって設立された、ボストンに住む黒人のための互助組織である。ウォーカーがボストンに来た時期には既に没していたが (1808年没)、ホールはボストンの黒人活動家としては最も高名で、「黒人の自由」を訴え、1780年代から自由黒人のアフリカへのエミグレーションを最も早くから計画するなど、「エミグレーションист」としての側面を有した人物である。ホールは「黒人の互助組織」として「アフリカン・ロッジ No. 1」を設立すると、それを通じて「黒人の自由」を訴えた (Bracks 2012: 54)。例えば1797年、ホールは ‘A Charge’ と題するパンフレットを発行し、黒人差別とニグロフォビアが強まる中で、ロッジのメンバーに次のように訴えた。

ボストンのあちこちの通りで我々は日々、侮辱に遭遇する。特に余暇を過ごす公共の場などにおいては、どれだけ不名誉な方法で虐待されることか。[中略]。我が同胞よ、我々が受け続けるこれらと他の多くの虐待の中においても、落胆せずにいよう。なぜなら、暗黒の時は過ぎ去り、日が昇ろうとしているからだ。我が同胞よ、6年前のフランス領西インド (ハイチを指している) では、我々のアフリカ同胞がどんなに暗い日々を過ごしていたかを思い出すがよい。朝から晩まで鞭の音しか聞こえず、(フランス人の) マスターのプライドと無慈悲で残酷な心を満たすためだけに、それらの不幸な人々は吊るし上げられ、馬車で引き裂きさかれ、火あぶりにされ、様々な拷問を受けてきた。しかし、神のご加護を受け、その光景は変わった。エチオピアは神に

向かって両手を伸ばし、(黒人たちは) 奴隷状態のどん底から自由と平等を獲得したのである (Hall 2001 [1797]: 47)。

ホールは、ボストンのようなリベラルな場所においても黒人たちがひどい差別を受け、虐待されていることを述べた上で、「落胆することはない」と説いた。なぜなら、ハイチ革命で証明されたように、「エチオピアは神に向かって手を伸ばし」、すなわち「黒人たちは神に助けを請う」ことによって、自由と平等を獲得できたからである¹⁰⁾。ホールが ‘A Charge’ を出版した当時 (1797年)、ハイチではフランス人が駆逐され、事実上黒人たちが島を統治していた。ハイチ革命は、黒人たちによって成し遂げられた、ひとつの成功した革命モデルであり、その存在自体によって、ホールを含む多くの黒人たちは「本当の自由と平等」を獲得できるという期待感を膨らませたのであった。ウォーカー自身もホールの ‘A Charge’ を読んでであろうが、少なくとも「アフリカン・ロッジ No. 1」のメンバーにホールの思想が受け継がれているはずで、ウォーカーも間違いなくそれから影響を受けたであろう。「アフリカン・ロッジ No. 1」に入会が認められると、ウォーカーはすぐに「マスター」の地位を与えられ、組織の中で中心的人物になっていったというから (Hinks 1997: 70)、「落胆することはない」、「ハイチ人のように自由と平等を獲得することができる」とするホールの考えにそれだけ共鳴し、奮起したということであろう。ウォーカーは、「アフリカン・ロッジ No. 1」の主要メンバーになった際、ホ

10) 「エチオピアは神に向かって両手を伸ばす」というフレーズは、旧約聖書の詩篇サームズ (Psalms 68:31) に登場する。原文は、“Princes shall come out of Egypt; Ethiopia shall soon stretch out her hands unto God.” で黒人たちは好んでこのフレーズを使った。エチオピアは「黒人の国」で、エジプトから現れる王子もまた黒人として語られる。キリスト教徒の黒人たちにとって、これは旧約聖書に基づいた、メシア思想の一種だと言えよう。

ールの思想に触れ、自由と平等への権利意識を更に高めていったことが予想される。

独立革命以前の1775年にホールによって設立された「アフリカン・ロッジ No. 1」はボストンの中でも黒人組織としては歴史が深く、ヒンクスによれば、ボストンの黒人コミュニティの中心的存在であった。従って、そのメンバーになり、しかもマスターとしての地位を与えられたことは、様々な黒人組織の黒人リーダーはもちろんのこと、反奴隷制度を訴える白人たちとも知り合うことにもつながったであろう。ボストンでは、1808年以降、「アフリカン・ロッジ No. 1」が中心になり、他の黒人組織を巻き込みながら、奴隷貿易廃止（奴隷制度自体の廃止ではない）を祝うパレードが毎年行われた¹¹⁾。また、1824年以降は、黒人たちの間でカリブ諸島への移民に関心が高まったこともあり、同じように「アフリカン・ロッジ No. 1」が中心になって、ハイチ独立の祝賀パレードがボストンで行われるようになった。1828年のパレードでは、ウォーカーは第二事務官（the Second Marshal）として運営に関わっている（Hinks 1997: 73-74）。日々の生活の中であからさまな差別があるにしても、ウィルミントンやチャールストンと較べればはるかに自由なボストンで、さまざまな活動家（白人も含めた）に出会い、ウォーカーが「自由と平等」のイデオロギーに触れ、その思いを深めていったであろうことが想像できる。

3. マサチューセッツ全黒人協会

1826年に設立された「マサチューセッツ全黒人協会」（Massachusetts General Colored Association, 以降「MGCA」と呼ぶ）においても、ウォ

11) ボストンだけでなく、このようなパレードは中部のニューヨークやフィラデルフィアでも行われていた（Hinks 1997: 73）。1808年の「奴隷貿易の廃止」は、合衆国憲法に記されていたので、それを受けてのことであった。

ーカーはそのメンバーとして存在感を發揮した。スタッキーによれば、このMGCAは、「マサチューセッツ」とうたっているが、アメリカ合衆国全土の黒人を団結させようとしていたという点で画期的であり、一連の「全国黒人大会運動」(National Negro Convention Movement)を予感させるような黒人組織であった(Stuckey 1987: 135)。1830年9月にフィラデルフィアで開催された第一回全国黒人大会は、アメリカで初めて、各地の黒人リーダーが一同に会して会議を行った大会であった。バルティモアのヘゼキア・グライス(Hezekiah Grice)という自由黒人が発起人となり、各地の黒人リーダーに招待状を送り、参加を募った。北部と中部の諸都市はもちろん、メリーランドやヴァージニアなどの南部の州からも参加者(南部ということもあり1名ずつと少数)があり、40名の黒人リーダーたちが4日間に渡って話し合いを行った。その中で、「アメリカ自由黒人協会」(American Society of Free People of Color)の設立を決議し、アメリカに住む黒人たちの生活と地位の向上を図ると同時に、カナダに黒人たちが移住するための居住地を開拓することが宣言された。黒人たちの生活と地位を向上させるために、「黒人の団結、自助・自立、農業や機械技術などの実践的職業プログラム」を推奨した(Raboteau 1995: 101)。1861年に南北戦争が始まるまで、ほぼ毎年開催されることになったこの黒人大会は、アメリカの「黒人の団結」に現実味を与えるとともに、南部の奴隷解放に向けての圧力にもなったという意味で、非常に重要である。興味深いことに、リチャード・アレンは、フィラデルフィアの代表として第一回大会に参加し、議長を務めている。それだけ、リチャード・アレンという人物が黒人たちの間で高名だったということであろう。フィラデルフィアからは、アレンとともにアフリカ移住計画を推進したジェームス・フォーテンも参加している。ボストンからは、ウォーカーが通ったメソヂスト教会の監督で、盟友の、サムエル・スノーデンが参加している。残念ながら、

ウォーカーは大会が実施される1か月前の1830年8月に死亡しているので、彼の名前は参加者リストにはない¹²⁾。「アフリカン・ロッジ No. 1」やMGCAでも代表格だった上、盟友のスノーデンが参加していることを考えれば、ウォーカーがこの大会に参加していたとしてもまったく不思議ではない。

全国黒人大会の開催を予感させる組織だったMGCAの集会で、1828年、ウォーカーは代表者としてスピーチを行っている。アメリカ初の黒人新聞、*Freedom's Journal* (1828年12月19日付)に‘David Walker Addresses the Massachusetts General Colored Association’と題して掲載されたそのスピーチ中で、次のように述べている¹³⁾。

この組織(MGCA)の第一の目的は、実践的および便宜的に、アメリカ合衆国全土の黒人を団結させることである。黒人協会を各地に設立し、連絡を取り合うのだ。そして我々の悲惨な状況を少しでも良くすることは何でも、惜しみなく共有するのだ。

この呼びかけは、まさに各地の黒人リーダーが一同に会した全国黒人大会の開催を予感させるものである。ウォーカーにとって、北部や中部の自由黒人だけが救われればよいという考えは、まったくナンセンスであった。ウォーカーが南部出身で、南部の奴隷たちに同情的だったということだけが理由ではない。ウォーカーは、「アメリカ合衆国全土の黒人」は同胞であり、特に南部の奴隷制度が廃止されないかぎり、北部や中部の自由黒人

12) 第1回全国黒人大会の議事録、*Minutes and Proceedings of the First Convention of People of Color, 1831* (online) を参照。

13) このスピーチの全文がヒンクス(Hinks 2000)の*David Walker's Appeal*に収められていて、ここではそれを参照した(Walker 2000 [1828]: 85-89)。

の生活や地位も向上することはないと確信していた。「スレイヴ・キャッチャー」が街をうろつき、男たちだけでなく妻や子供たちを捕まえては、1人50ドルから100ドルで南部の奴隷州へ売りとばしていることに言及し、南部の奴隷制度の存続が決して他人事ではないことをスピーチの中でも強調している (Walker 2000 [1828]: 88)¹⁴⁾。「スレイヴ・キャッチャー」の被害に遭わないにしても、毎日の生活の中での差別や抑圧はあり、「我々の悲惨な状況」は続く。ゆえに、「アメリカ合衆国全土の黒人」がネットワークを築き、団結しなければならないのである。ウォーカーがMGCAのメンバーになり、その代表としてスピーチした1828年には、スノーデンの黒人教会や「アフリカン・ロッジ No. 1」のリーダー格として既に頭角を現し、ボストンの黒人社会の中で有力な黒人活動家としての地位を築いていた。スピーチからは、ボストンの有力黒人活動家としてだけでなく、全米の黒人を「立ち上がらせよう」とする活動家としての自覚が見て取れる。「黒人全体の自由と平等」は、もはや単なる希望ではなく、「当然の権利」として主張され、行動を起すように訴えたのである。

4. フリーダムズ・ジャーナル

ウォーカーのMGCAでのスピーチが掲載された *Freedom's Journal* との関係においても、ウォーカーは深くコミットしていた。その「アメリカ初の黒人新聞」が *Freedom's Journal* と名付けられたのは、まぎれもなく

14) 自由州における「スレイヴ・キャッチャー」の脅威がどれほど現実的なもので、南部での奴隷生活がどれほど厳しいものであったかを知る上で非常に参考になるのが、ソロモン・ノーサップの *12 Years A Slave* (1853) である。自由黒人ソロモン・ノーサップは、1841年にワシントン D.C. で「スレイヴ・キャッチャー」に誘拐され、南部に奴隷として売られた。その体験をもとに書かれたのが、*12 Years A Slave* であった。ノーサップの体験記は2013年に映画化され、第86回アカデミー賞作品賞他、主要3部門を受賞した。

「黒人の自由」がその新聞の理念の中心にあったからであり、ウォーカーがその刊行に深くコミットしていたのは、その理念に共鳴していたからに他ならない。1827年3月16日、ニューヨークで週刊新聞として発売が開始された *Freedom's Journal* は、サムエル・コーニッシュ (Samuel Cornish) とジョン・ラスウォーム (John Russwurm) という2人の自由黒人が創刊したものである (Bacon 2007: 37)¹⁵⁾。「黒人の自由」と「黒人の生活と地位の向上」に資することをそのモットーにしたその新聞が発刊される4週間前、すなわち1827年2月中旬、ボストンの黒人有志がウォーカーの家に集まり、*Freedom's Journal* に資金援助をするか否かを話し合っている。そして、「最大限の援助を行う」ことを決意した (Hinks 1997: 75)。この集会がウォーカーの自宅で行われていることから、ボストンで *Freedom's Journal* を支援する動きは、恐らくウォーカーがリーダーとなって現れたものであろう。また、ボストン地区における新聞販売のエージェントも担っていたことから (Bacon 2007: 54)、ウォーカーが *Freedom's Journal* に深くコミットしていたことは間違いない。

Freedom's Journal が創刊された背景には、ベーコンによれば2つの大きな動機があった。ひとつは、白人たちが新聞を使って展開している黒人たちの誹謗・中傷に関し、同じ新聞というメディアを使って対抗しようという動機であった。当時、様々な新聞が黒人による犯罪を詳細かつセンセーショナルに報道し、馬鹿にするような風刺画を使って、黒人を誹謗・中傷していた。コーニッシュとラスウォームが、*New York Evening Post* や

15) *Freedom's Journal* を創刊するにあたって、コーニッシュとラスウォームはニューヨークの有志黒人と議論を重ねている。興味深いことに、彼らが集まり、議論を重ねた場所は、アレクサンダー・クラメル (Alexander Crummell) の父、ボストン・クラメル (Boston Crummell) の家であった。1819年生まれのアレクサンダー・クラメルは当時8歳だったということになるが、父がそのような活動にコミットしていたことは、少なからず彼の人生に影響を与えたと思われる。

Morning Chronicle などの新聞を名指しして、「それらの報道や論壇が我々を誤って描写するから、我々はひどく苦しんでいる」と訴えたのは、そのためであった (Bacon 2007: 39-40)。それらの報道は、黒人たちをよく思っていない白人たちによって消費されると同時に、白人社会に更なるニグロフォビアを生み出していた。*Freedom's Journal* は、白人の新聞が生み出していた黒人の誹謗・中傷に対抗するカウンター・ナラティヴを、黒人たち自らが展開するための道具として機能することが期待されたのである¹⁶⁾。

あとひとつの動機は、様々な黒人組織や黒人リーダーの主張を「黒人新聞」というひとつのプラットフォームに載せ、「(黒人としての) ナショナルな意識を滋養し、彼ら自身の運命を彼ら自身で決める権利を主張する」ためであった (Bacon 2007: 41)。リチャード・アレンが活躍したフィラデルフィアでは「黒人社会」の成熟が既にみられたし、ニューヨークやボストンでも黒人たちは、白人社会とは異なる彼ら独自のニーズや目的をもち、それらを公共の場で要求するようになっていた。ベーコンによれば、コーニッシュとラスウォームは、「白人の人種主義への抵抗よりも、黒人の集団的アイデンティティと自決の方により重きを置いていた」 (Bacon 2007: 41)。それまで各地の黒人組織や黒人リーダーたちはアドホックにしか連携していたかったが、*Freedom's Journal* は彼らが同じプラットフォームで意見を交わすことを可能にした。そうすることによって、黒人たちの間に「共同体意識」が強まり、集団的に一体となって権利の主張をすることができた。これが、*Freedom's Journal* を創刊したあとひとつの動機であった。もちろん、当時、自由黒人で読み書きができる者は少なからずいたので、一般の自由黒人をも対象としていたし、むしろ、彼らを啓蒙

16) リチャード・アレンの『ナラティヴ』は、まさにそれをするためのパンフレットであった。

し、「黒人共同体」として、「尊厳をもって扱われる権利」の意識を高めさせたいという動機もあった。それらの動機に基づく目的を達成する上で、「新聞は最も経済的で便利な手段であることを、経験上我々は知っている」とコーニッシュとラスウォームが述べているように、彼らは「新聞メディアの力」をよく理解した上で *Freedom's Journal* を創刊したのであった。ウォーカーも、この「新聞メディアの力」をよく理解していたに違いない。だからこそ、*Freedom's Journal* を経済的に支援し、販売エージェントの役割を担っていたのだ。そしてその *Freedom's Journal* をプラットフォームにして、自らも含め各地の黒人組織や黒人リーダーたちが活発に「自分たちの未来」について議論し始めたとき、ウォーカーは自分が思い描いた「黒人の自由と平等」と「黒人の団結」がより現実的な、手に届く目標として思えたにちがいない。そのことは、尊厳をもって扱われる権利、すなわち自由・平等に扱われる権利に関する意識を、高めずにはいられなかったであろう。

5. 黒人組織と「権利意識」の高まり

ここまでみてきたように、ボストンに移住してからウォーカーは様々な「黒人組織」に入り、中心メンバーとして活発な活動を行うようになった。そのことが、「黒人の自由と平等」に関するウォーカーの権利意識をより一層高める結果になったことは間違いない。その理由としては、これまでみたように、ボストンでウォーカーが深くコミットした黒人メソヂスト教会、「フリカン・ロッジ No. 1」、MGCA、*Freedom's Journal* がすべて、黒人の自由、平等、地位向上、団結、奴隷解放を熱心に訴えることをモットーにした黒人組織であったということが挙げられる。チャールストンで AME 教会のメンバーとなり「デンマーク・ヴィシーの乱」を経験したウォーカーだったからこそ、ボストンに移住した時それらの黒人組織に加入

したのであろうが、それらの黒人組織には、先ほど述べたようなモットーを支持する自由黒人たちが沢山いたはずで、彼らとの交流や議論を通じて、「自由と平等」に対するウォーカーの思いはより一層強いものになっていったと考えられる。そうだったからこそ、それらの黒人組織を牽引していくような「リーダー格」になっていったのである。

次に、ポストン時代にウォーカーが所属した黒人組織が、マサチューセッツ州の黒人コミュニティと密接なネットワークを形成していただけだけでなく、フィラデルフィアやニューヨークなどの諸都市に点在する他の黒人組織ともネットワークを築いていたことも挙げられる。黒人メソヂスト教会や「アフリカン・ロッジ」は他の都市にも広まっていたし、*Freedom's Journal* は北部や中部沿岸地域の諸都市の多くにエージェントを配置していた¹⁷⁾。このような「黒人ネットワーク」の広がりが、アメリカで初めて、各地の黒人リーダーが一同に会して会議を行った大会、すなわち1830年9月の第一回全国黒人大会の実施につながったのである。ウォーカーは、自らがリーダーのひとりとなった様々な黒人組織を通じてこの

17) 黒人メソヂスト教会が、AME 教会を含め、南部でさえもかなりの広まりを見せていたのはこれまで見てきたとおりである。「アフリカン・ロッジ」は、プリンス・ホールを初代グランド・マスターにして、まずはポストンに「No. 1」が1784年に設立され、その後ロードアイランド州、ニューヨーク州、ペンシルヴェニア州、メリーランド州、ワシントン D.C.などで支部を増やしていった (Wesley 1968: 116)。*Freedom's Journal* のネットワークは、創刊当初から既にかかなりの広がりをもっていた。創刊時に販売エージェントが配置された都市は、ポートランド (メイン州)、セーラムおよびポストン (マサチューセッツ州)、プロヴィデンス (ロードアイランド州)、ニューロンドン (コネティカット州)、フィラデルフィアおよびコロンビア (ペンシルヴェニア州)、バルティモア (メリーランド州)、アルバニー (ニューヨーク州)、プリンストンおよびニューワーク (ニュージャージー州)、ワシントン D.C.であった。その後すぐに、ハイチのポルト・プランス (首都)、イギリスのリバプール、カナダのワーテルローなどの海外に加え、アメリカ南部のフレドリックスバーグ (ヴァージニア州) とエリザベスタウン (ノースカロライナ) にさえもエージェントを置いた (Bacon 2007: 53)。

ような「黒人ネットワーク」の広がりを実感できたと考えられる。そして黒人の自由、平等、地位向上、団結、奴隷解放を熱心に訴えることをモットーにした黒人組織の、「黒人ネットワーク」の広がりは、ある種の、「共同体としての黒人」の勢力や影響力の増大、もしくはエンパワーメントをウォーカーに予感させたはずである。人または集団は、自らの勢力が増したと感じるとき、自らの要求を強めるものである。「黒人ネットワーク」の広まりと「黒人勢力」の増大を実感するにつれて、ウォーカーが黒人の自由、平等、地位向上、奴隷解放を以前より増して期待するようになったとしても不思議ではない。

さらに、ウォーカーが所属した黒人組織が、北部や中部のリベラルな都市の「自由な空気」の中で生まれ、発展していったものであったということも、「黒人の自由と平等」に関するウォーカーの権利意識をより一層高める要因になった。南部出身のウォーカーからすれば、北部や中部の都市は予想以上に自由な空気に満ちた場所であった。ウォーカーは生まれ育ったウィルミントンの時代から自由黒人として生きてきたが、ボストンの自由は次元が異なっていた。南部諸州では、黒人たちによる「抗議運動」が法的に禁止されていたことはもちろんのこと、事実上集会さえも禁止されることが多かった。一方、ボストンやフィラデルフィアなどの北部と中部諸州のリベラルな都市では、黒人による抗議活動や集会も認められていた (Stuckey 1987: 132)。実際、*Appeal* のような過激なパンフレットの出版と流通が許されていたこと自体、ボストンでは黒人にも高度な言論と表現の自由が与えられていたことを表している。*Appeal* が南部で流通し、激昂したジョージア州知事がボストン市長のハリソン・グレイ (Harrison Grey) に対してそれを出版禁止処分にするように求めたが、「ウォーカー氏が合法的に彼の思想を表現することに関して、私はいかなる権力も持たないし、そうする意思もない」と突っぱねたというから、どの程度ポスト

ンに「自由の空気」が流れていたかが分かる（Aptheker 1965: 43）。ボストンの北に位置するヴァーモント州の議会でも、1826年、南部のノースカロライナ州に対して「奴隷制度は、自由で啓蒙された人々にとって耐え難き邪悪である」という決議を送りつけ、「アメリカ合衆国でその廃止をするための、中央政府によるあらゆる施策に協力する用意がある」と宣言している。1820年代から1830年代にかけて北部と中部の白人社会で反奴隷制度の動きが活発化していたが、それは、ライバルであるイギリスが西インド諸島で奴隷制度廃止に踏み切ったことも関係している（Aptheker 1965: 33）。もはや、国際的にも奴隷制度は「道徳的に許されない制度」となりつつあったのである。ウォーカーが所属した黒人組織とそのネットワークは、このような「啓蒙主義的価値観」が充満した北部や中部の都市で発展していったものであった。ウォーカーは、啓蒙主義がより具現化された北部に移住し、南部ではありえないような自由の中で、黒人組織の運営に関わっていった。そのことが、ウォーカーの「自由と平等」に対する権利への期待感を高めたことは間違いない。

第4節 権利意識のギャップ

チャールストン時代からボストン時代にかけて、「黒人の自由と平等」に関するウォーカーの権利意識は高まっていった。それは、ここまで見てきたとおりである。その一方で、ウォーカーは早くから南部の奴隷黒人を含めた「黒人全体」と自己同一化していたので、南部に奴隷制度が存在する限り、自らを含めた「黒人の自由と平等」に関する権利は著しく侵害されたままであると考えた。この「権利意識のギャップ」は、ウォーカーを急進化させ、*Appeal* でなされたような過激な訴えが現れるに至った。

Appeal は、「序章」、「奴隷制に基づく、われわれの悲惨な状態」（第一

章)、「無知の結果に基づくわれわれの悲惨な状態」(第二章)、「イエス・キリストの宗教の説教家に基づくわれわれの悲惨な状態」(第三章)、「植民計画に基づくわれわれの悲惨な状態」(第四章)という構成になっていて、それぞれ「われわれの悲惨な状態」、すなわち「我々黒人たち」に対する差別、迫害、自由と平等の権利の侵害を異なる側面から詳しく述べている。以下では、ウォーカーがそれらをどのように認識し、「権利意識のギャップ」を拡大させていったかを見ていくことにする。

1. 黒人を「家畜」とみなす奴隷制度

Appeal 全体を通じてウォーカーが主張しているのは、「アメリカの奴隷制度の特殊な残忍性」である。「序章」の冒頭で、ウォーカーは次のように述べている (Walker 1975 [1829]: 35)。

人びとは、エジプトにおけるイスラエル人やスパルタの奴隷、あるいはローマ人の奴隷について語る。しかしこれらの古代異教徒国家のもとにおける苦しみは、啓蒙化されたキリスト教国家のもとにおけるわれわれの苦しみと比較するとき、無に等しいのだ。

ここでウォーカーが言わんとしていることは、アメリカの奴隷制度が、道徳的に劣っているはずの「古代異教徒国家」のそれよりも残忍だということである。エジプト、ギリシャ、ローマなどでも古代において奴隷制度は存在したが、それらのどれと較べてもアメリカの奴隷制度ははるかに残忍だということだ。アメリカ人が「啓蒙化されたキリスト教徒」であるにもかかわらず、「古代異教徒」よりもっと残忍なことをしているのは、全く驚くべきことである。黒人たちからしても、「啓蒙化されたキリスト教国家」で生まれ、その中で生き、啓蒙主義とキリスト教の精神に触れている

(多くは染まっている)がゆえに、苦しみは計り知れないほど大きなものになる。

この「苦しみ」とは、より具体的には何を意味するのか。それは、「人間として扱われていないこと」に由来する苦しみである。ヒンクスがいうように、アメリカの奴隷制度の残忍性は、「肉体的な苦しみを与える」ということに加え、「イデオロギー的に黒人を非人間化する」ところにあった (Hinks 1997: 200-201)。Appeal の第一章「奴隷制に基づく、われわれの悲惨な状態」では、主としてそのことが述べられている (Walker 1975 [1829]: 41)。

北アメリカや南アメリカのインディアン、ギリシャ人、大英帝国の国王のもとに従属したアイルランド人、主のいにしえの民であるユダヤ人、大洋の島々の住民たち……、要するに、地上すべての住民 (アフリカ人を除いて) は、「人」と呼ばれている。もちろん、それゆえに自由であるし、そうあるべきなのだ。しかし、我々 (黒人) とわれわれの子供たちは「獣」といわれているのだ！そして当然のことながら、アメリカ人とその子供たちのために、永遠に奴隷であり、そうでなければならないのだ！

ウォーカーは、インディアン、ギリシャ人、アイルランド人、ユダヤ人たちが蔑視されていることを認める。しかし、彼らは少なくとも「人」として見なされているのであり、それゆえに、奉公人になったとしても「奴隷」にはならない。一方、黒人は「獣」と見なされているのであって「人」ではない。読み書きは当然のごとく禁止され、白人たちがいない場所での集会も、それが宗教活動であったとしても禁止されていた。また、いかなる場合であっても、奴隷黒人が白人と法廷で争うことはできなかつ

た (Aptheker 1965: 12)。奴隷制度下における奴隷黒人は「財産」(chat-tel) であって、家具や家畜と同じだった¹⁸⁾。

黒人たちが非人間化または半獣化されているこの状態に、ウォーカーは激しい憤りを感じた。聖書では、確かにユダヤ人がエジプト人の奴隷になったと記されている。しかし、「エジプト人がイスラエルの子らに向かって、お前たちは『人間』ではないのだといって『耐えられないような屈辱』を加えた」という一文は聖書のどこを見ても見当たらないとウォーカーは言い、黒人の状況を次のように述べる (Walker 1975 [1829]: 44)。

彼ら (白人) はわれわれを彼らに屈服する奴隷というみじめな状態におとし入れ、ももとは「猿」か「オラウータン」の出であるといって笑いものにしているではないか。おお、神よ、わたしは思いやりのあるすべての人に訴える。これは耐え難いことではないのか、と。

ユダヤ人はエジプト人の奴隷だったとしても「人間」だということは否定されなかった。しかし、アメリカでは、黒人たちは「猿」や「オレウータン」と関連づけられ、「非人間化」されて、しばしば笑いものにされた。したがってウォーカーにとって、アメリカの黒人はただの奴隷ではなく、

18) 1789年に憲法制定会議がフィラデルフィアで召集されたとき、国会への代表の出し方に関し、奴隷の数をどう勘定するかという問題が持ち上がった。南部諸州では奴隷黒人を名実ともに「財産」として扱っていたので、それを逆手にとって北部諸州の代表は「奴隷は財産であり、それゆえに代表を出すのに値しない」と主張した。奴隷を「ひとりの人間」として扱ってしまえば、南部諸州に割り当てられる代表者の数が跳ね上がってしまい、北部諸州の立場が弱くなってしまふからである。北部諸州の人たちは、このことにより建前上、「奴隷は財産である」と言わなければなくなってしまった。結局、憲法の策定に関して、「自由人以外の者」すなわち奴隷は、5分の3としてカウントするという妥協案がとおり、有名な「5分の3条項」(合衆国憲法第1条第2節)が誕生した (Franklin 1978: 99)。

「非人間化された奴隷」、「獣」、「家畜」であったという点で、特殊であった。

より学識があるアメリカ人たちが黒人たちを「人間」から一段劣った種だと主張し、黒人たちを「非人間化」しないまでも「半人間化」していたことは、ウォーカーにとってより深刻な問題であった。ウォーカーは、「ジェファーソン氏が、われわれは体と精神の両面において白人に劣ると全世界に宣言したではないか」と、トマス・ジェファーソンを名指しにして批判する (Walker 1975 [1829]: 44)。ここでウォーカーが言及するのは、ジェファーソンの『ヴァージニア覚え書』(1782) に出てくる黒人に関する記述である。その著書を見てみると、確かにジェファーソンは黒人たちを「半人間化」していることがわかる (Jefferson 1972 [1782]: 252)。

記憶、推理、想像などの能力で彼らを比較してみると、記憶力の点では白人と同じであると思われるが、推理力では、ユークリッドの研究を追ったり、理解したりすることのできるものはほとんどいないだろうから、白人に比べてかなり劣っており、想像力は鈍く、下品で、異常であると思われる。

さらに、このように黒人の思考力が白人のそれと比べて劣っていることを述べた上で、「黒人の劣等性は単に彼らの生活条件の結果ではない」 (Jefferson 1972 [1782]: 254)、「白人と黒人との相違を生みだしているものは、彼らのおかれた条件なのではなくて、自然の力だということになる」 (Jefferson 1972 [1782]: 256) と言っていることから、ジェファーソンは「黒人の劣等性」を「自然」で「所与」なものとして考えていたのである。その一方で、「この問題に関するわれわれの結論によつては、ある一つの人種全体を、創造主によって定められた諸生物間におけるその地位

から落下させてしまうことにもなる」と、「黒人の資質」に関する結論は慎重に下すべきだと言いながらも、ジェファースンは、次のような結論を下す (Jefferson 1972 [1782]: 258)。

黒人がもともと個別の人種であるのか、それとも時代や環境によって別個のものとなったのかはともかくとして、与えられた才能という点では心身両面で白人よりも劣っているのではないかという気がするだけで、申し述べておきたい。同じ種属のなかの違った種の生物や、同じ種のなかのいろいろな種類の生物がそれぞれことなった資質をもちうると想定することは、経験に反することではない¹⁹⁾。

ジェファースンが、白人と黒人は「同じ属のなかの違った種の生物」であり、黒人が心身両面で「劣等種」であると考えていたことはほぼ間違いない。そしてその結果としてアメリカの奴隷制度の将来を考えた時、ジェファースンは次のような結論に達したのである (Jefferson 1972 [1782]: 260)。

19) ジェファースンは、黒人の肌の色を「不幸」だと言っていて、黒人たちも「白人の方が美しい」ことを分かっていると断言している。現代の価値観からすると驚くべき発言だが、現在でも一部の白人たちの心に宿る「白人至上主義」と「黒人蔑視」の源流を見て取ることができる。少々長いが、以下にジェファースンの言葉を抜粋する。「黒人の表情を支配しているあの永遠の単調さ、あらゆる感情をおおいかくしているあの黒い不動のヴェールよりも、白人のように赤と白がみごとに混ざりあい、皮膚の色にさす紅潮の程度によってあらゆる感情が表現される方が、より一層好ましくはないだろうか。さらに加えて、流れるような髪の毛や、より優美な身体の均整。また、オラウータンが自分自身の種族のメスよりも黒人の女性の方を好むのとまったく同様に黒人が白人をより好むことからわかるとおり、黒人自身も白人自身の方が美しいと判断している」 (Jefferson 1972 [1782]: 250)。

(古代) ローマ人たちの場合、奴隷解放のためには、解放という一つの手段だけを講じればそれでよかった。解放された奴隷は、白人であったから、主人の血を汚さずに、混ざり合ったであろう。しかしわれわれの場合には、その後（黒人奴隷解放後）に、歴史上に例をみないような何らかの手段を講じることが必要である。すなわち奴隷たちは、解放された暁には、血の交わりのできない所へ移されるべきなのである。

ジェファーソンがここで示唆している「歴史上に例をみないような何らかの手段」とは、黒人のアフリカ送還である。ジェファーソンにとって、黒人は「劣等種」であるがゆえに、混ざり合った場合には白人の血を汚してしまうことになる。したがって、既に解放された自由黒人と、今後解放されるかもしれない黒人は「血の交わりのできないところ」、すなわちアフリカへ送還されるべきなのである。ジェファーソンがアメリカ植民協会（ASC）の創設に寄与したのは、このような人種主義的な認識がその根本にあったのである。ジェファーソンの『ヴァージニア覚え書』が「アメリカ史上重要な文書とされるのは、その前半における博物学的な知識であるとともに、その後半に述べられているジェファーソンの政治・社会思想による」という（中屋 1975: 365）。ジェファーソンの「黒人認識」は、少なくとも当時のアメリカでは「博物学的知識」に基づいたものであり、ジェファーソンが「偉大な人物」であるがゆえに、彼が示した「黒人劣等種論」が、ひとつの「常識」としてアメリカ社会（特に南部）に定着したとしても何ら不思議でなない。ヒンクスによれば、ジェファーソンによる黒人の人種観は、白人たちの意識の中に深く沈み込むと同時に、黒人たちに対する最も野蛮な政策を正当化する口実として使われるようになっていった（Hinks 1997: 207）。出版後約半世紀も経っている『ヴァージニア覚

え書』をウォーカーが引用し、ジェファーソンの「黒人劣等種論」を懸命に批判したのは、そのような事情があったからである。

ウォーカーは *Appeal* の第一章「奴隷制に基づく、われわれの悲惨な状態」で、アメリカの奴隷制度が世界史上「特殊」で、「最も残忍」であることを主張した。「黒人劣等種論」に基づいた奴隷制度が、黒人の人間性を著しく低下させると同時に、奴隷黒人を「獣」や「家畜」と同じように扱ったことが、世界史上「特殊」で、「最も残忍」だとウォーカーは考えたのである。「われわれは『人』だろうか！ わが兄弟たちよ、わたしはあなた方にたずねたいのだ。われわれは『人』だろうか」とウォーカーは黒人たちに感情的に問いかける (Walker 1975 [1829]: 51)。「あなた方の自由はあなた方の権利であることを思い起こしてほしい。あなた方は彼ら (白人) と同様に、人間なのだ」 (Walker 1975 [1829]: 102)。啓蒙化されたキリスト教徒のウォーカーにとって、黒人たちが「人間として扱われないこと」は、「自由と平等の権利の究極的な侵害」に思えたに違いない。そしてそれが「権利意識のギャップ」の拡大につながったであろうことは、疑う余地がない。

2. 白人牧師たちの偽善行為

Appeal の第三章「イエス・キリストの宗教の説教家に基づくわれわれの悲惨な状態」は、白人牧師たちの「神への冒瀆」ともいえる「偽善行為」によって、黒人たちがどれだけ悲惨な状況に追いやられたかを告発した章である。19世紀前半、「グレート・リバイバル」(the Great Revival) と呼ばれるキリスト教復興運動がアメリカ各地で繰り広げられ、その影響で黒人たちのキリスト教活動も活発化したが、スタッキーがそういうように、黒人たちは黒人との関係における白人たちの宗教的偽善行為 (religious hypocrisy) をいやというほど思い知らされていた (Stuckey 1987:

126)。強調しておきたいのは、「イエス・キリストとその使徒たちによって説かれたような純粹でけがれの無い宗教は、地上のどこにも見出すことはできない」とウォーカーが言っているように、彼自身は信心深いキリスト教徒だということである (Walker 1975 [1829]: 69)。ウォーカーが告発しているのは、キリスト教自体ではなく、偽善行為を働く白人聖職者たちである。「われわれの悲惨な状況」のそもそもの始まりを、ウォーカーは次のように述べている (Walker 1975 [1829]: 70)。

キリスト教世界ではよく知られていることだが、貧欲で有名だったカトリック教会の司祭であり説教家であり、コロンブスの二回目の航海に同行した探検家でもあるバルトロメ・ラス・カサスは、アフリカのポルトガル植民地からアフリカ人をつれてきて金銀を掘らせ、彼らのプランテーションで働かせることをエスパニョーラ島の同国人であるスペイン人たちに提案した。[中略]。この卑劣漢 (説教家ラス・カサス) は彼の抑圧の計画に成功し、1503年に最初の黒人が新世界に輸入された。

初めて黒人を新大陸に輸入したのはウォーカーがここで言うようにスペイン人やポルトガル人で、その最初の輸入先はエスパニョーラ島 (スペイン領時代のハイチ島) であった。ウォーカーにとっての問題は、アフリカ人が奴隷として輸入されたということもさることながら、それを提案したのが、よりによってキリスト教の司祭であったことである²⁰⁾。ゆえに、ウ

20) フランクリンによれば、新世界への黒人貿易が正式に始まったのは、確かにこのラス・カサスの提案によるところが大きい。ラス・カサスは、先住インディアンが奴隷にされてひどい扱いを受けないで済むように、アフリカ人を奴隷にするように勧めたという。フランクリンによれば、黒人貿易が正式に始まったのはウォーカーがいう1503年ではなく、1517年である (Franklin 1978: 35)。

ウォーカーは次のようにいう (Walker 1975 [1829]: 70)。

われわれの共通の主であるイエス・キリストの福音のうわべだけの説教家によって、われわれの悲惨な状態がアメリカで始まり、1503年より今日の1829年にいたるまで続いているのだ。

もちろん、ラス・カサスが黒人奴隷貿易の提案をしなかったとしても、誰か別の人物がそれをして、遅かれ早かれ同じ結果になった可能性は高い。だが、ウォーカーにとって、ラス・カサスがキリスト教の司祭であったことは決定的に重要であった。なぜなら彼が、白人の聖職者がいかに「うわべだけ」の「偽のキリスト教徒」であるかを象徴したからである。

ウォーカーにとって、白人聖職者はカトリックであろうがプロテスタントであろうが、スペイン人であろうがアメリカ人であろうが、残虐な偽善者だという点で同じである。アメリカの白人聖職者について、ウォーカーは次のようにいう (Walker 1975 [1829]: 72)。

「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人びとにもそのとおり
にせよ。」しかし聖書を手にもつアメリカの牧師は、われわれとその
子供たちを、最も卑しむべき奴隷制と悲惨な状態にとどめているのだ。

ウォーカーが許せないのは、黒人たちを「最も卑しむべき奴隷制と悲惨な状態」に追いやっているのが、ほかでもない「聖書を手にもつ」牧師だということである。ウォーカーは一例として、サウスカロライナ州で参加した伝道集会での出来事を次のように語る (Walker 1975 [1829]: 73)。

まったく驚いたことに、ある (白人) 牧師が立ちあがり、われわれ

(黒人) に向かって奴隷は主人に従順でなければならない、主人に対して義務を果たさなければならない、さもなければむち打ちをうける、むちはおろか者の背中を打つために作られたのだ、などといった。わたしがどのように驚いたかについて、人びとにしばらく考えてもらいたいのだ。

もちろん、全ての白人牧師たちがこのような感覚と価値観をもって黒人たちに接したとは言えない。事実、特に北部と中部の自由州では、奴隷制度廃止を熱心に訴え続けた白人聖職者たちは多くいた。しかし、ウォーカーがそういうように、先ほどの引用が牧師の口から出た言葉だということを見ると、驚きである。このように「あからさまに」黒人を差別した牧師がどれくらいいたかは定かではないが、ウォーカーの告発には、ある一定の根拠がある²¹⁾。

「聖書は人の皮膚の色によって区別することを教えているのだろうか」とウォーカーはアメリカ人牧師たちに問う (Walker 1975 [1829]: 76)。そうではあるまい。「聖書を手にもつ牧師」は、神の下全ての人を平等に扱わなければならないのだ。ウォーカーは聖書を引用して次のように言う。

21) ウォーカーは、次のような事件も紹介している。黒人たちがイエス・キリストのために祈りを捧げようとして教会に集まったときのことである。白人牧師は、自らを「パトロール」と呼び、「黒人たちが讚美や祈りを始めるやいなや、この卑劣漢どもは彼ら(黒人たち)に飛びかかり、引きずりだし、あたかもガラガラへびを打つように彼らを打つのである。情け容赦もなく打つので、黒人たちの多くは何週間も、ときには何か月もはい歩きすらできないほどになる」(Walker 1975 [1829]: 71)。ウォーカー自身がこの事件を目撃したのか、それとも誰かに聞いた話なのかは定かではない。「デンマーク・ヴィシーの乱」が起きた後、ウォーカーがいたチャールストンはもちろん、南部奴隷州では黒人たちの宗教活動が弾圧を受けたので、その中で起きた事件だった可能性は高い。

わたしは、天においても地においても、いっさいの權威を授けられた。それゆえに、あなた方は言って、すべての人々（原文は all nations）を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマ（洗礼）を施し、あなた方に命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。（マタイの福音書28: 18）

神は、天と地を支配する絶対權威である。すなわち、神は普遍的に、全ての人々の神である。ゆえに、「あなた方」牧師は、全ての人々を弟子とし、彼らに神の言葉と戒律を教えなければならない。そして「これらの命令には何の人種の区別もない」とウォーカーが強調するように（Walker 1975 [1829]: 76）、神の下では、全ての人々は平等でなければならない。ウォーカーは問う（Walker 1975 [1829]: 77）。

アメリカの説教者どもと人民は、神をどのように考えているのか。彼らは神の言葉を信じるのか。もしそうなら、神が欺かれると思うのか。あるいは、彼らは白人であり、われわれは黒人であるので、神が白人の彼らを重んじられるとでも思うのか。神は、最もよいと思われたので、われわれをこのように造られたのではないか。それならば、我々のある者が皮膚の色のゆえに他を軽蔑し、残酷に扱う権利がいったいどこにあるのか。

ウォーカーは、リチャード・アレンがかつてそう主張したように、神の下ではすべての人間が全く平等であり、肌の色の違いを理由に白人が黒人を不当に扱う権利はないと信じていた。白人の牧師とキリスト教徒たちは、本当はそのことを分かっているにもかかわらず、黒人を侮辱し、残酷に扱

っているのだ。それでもなお神の言葉を信じていると言うのは、神を騙していることに等しく、まったくの偽善行為である。ウォーカーは言う。「アメリカ人どもが行っているこのこと以上の宗教に対する冒涇は、いったいどこにあるのか」と (Walker 1975 [1829]: 77)。

神の言葉に従えば、黒人は白人と平等に扱われる権利がある。そして本来ならばそれを伝道する立場の牧師たち自身が、それに全く反する言動を繰り返している。白人と平等に扱われる権利意識が高まる一方で、それが侵害されている状況は、ウォーカーにとって納得のいかないことであった。白人のキリスト教牧師たちによる差別や抑圧、もしくはそれを黙認するかのような態度は、ウォーカーの「権利意識のギャップ」を拡大させる一大要因だった。

3. 「母国」アメリカからの追放

第四章の「植民計画に基づくわれわれの悲惨な状態」は、内容的にふたつに分かれていて、前半は主にアメリカ植民協会を批判することを目的に書かれている (後半については後述する)。ウォーカーはその中で、当該協会の「黒人たちをアメリカから追放する計画」がいかに黒人たちの権利を侵害しているかを訴えた。ウォーカーが特に批判の対象にしたのは、アメリカ植民協会の議長を務めたヘンリー・クレイである。クレイはケンタッキー州出身の有力政治家で、連邦政府の国務長官を務めたほどの人物である。クレイは、南部の奴隷制度擁護の立場を代表していると見なされていたから、奴隷制度廃止論者たちの批判をしばしば受けた。ウォーカーは、アメリカ植民協会第一回大会 (1816年12月) でクレイが議長として述べた言葉を引用し、クレイが自由黒人に関してどのような考えを持っていたかを説明する (Walker 1975 [1829]: 79)。

彼ら（自由黒人）の置かれた状況のゆえに、また彼らの皮膚の色に起因する克服しがたい偏見のゆえに、彼らはこの国の自由白人たちと決して融合できないのだ。それゆえに、彼らとこの国の他の住民に関していえば、彼らを追いだすことが望ましいのだ。

このクレイの認識は、ジェファースンが『ヴァージニア覚え書』で示したそれとほぼ同じである。すなわち、黒い肌をもつ黒人は「劣等種」であるがゆえに、「奴隷たちは、解放された暁には、血の交わりのできない所へ移されるべきなのである」という認識である（Jefferson 1972 [1782]: 260）。アメリカ植民協会の主要メンバーは南部奴隷州出身の政治家たちであり、クレイの認識はマジョリティを占めていた。ウォーカーがまず憂慮したのは、「白人と融合し得ない自由黒人たちをアメリカから追放する必要がある」という南部出身の有力政治家たちの認識であった。

「白人のアメリカが黒人の血によって汚される」ことに加え、「自由黒人が奴隷黒人と与える影響」をクレイらが心配していることも、ウォーカーは見抜いていた。アメリカ植民協会の目的について、ウォーカーは次のように指摘している（Walker 1975 [1829]: 80）。

自由であるといわれている黒人たちを、奴隷として不当に捉えられているわれわれの兄弟から引き離す計画を立てるために彼らは集まったのである。

すなわち、自由黒人が奴隷黒人と交流することがないよう、両者を引き離すことが目的のひとつだというのである。ウォーカーは、その理由を次のように述べる（Walker 1975 [1829]: 80）。

なぜなら、自由黒人が奴隷たちと一緒に住むことが許されれば、彼らは互いに交わりをもつであろう。そして当然のことながら、自由黒人たちは、奴隷たちは他の民族（原文は nations）同様に「人間」であり、疑いもなく「自由」であるべきだと教えて、奴隷たちに「悪習慣」を学ばせてしまうのだ。

クレイらは、自由黒人が奴隷黒人に「自由」というイデオロギーを吹き込み、その権利を要求するような「悪習慣」を奴隷黒人たちが学んでしまうことを心配したのだ。そのようなことが起きてしまえば、南部の奴隷制度の維持は難しくなる。南部の白人たちは、南部の奴隷制度をいかにして維持していくかということに関して、細心の注意を払っていた。南部の経済活動は、奴隷制度の上に成り立っていたからである。このようにウォーカーは、アメリカ植民協会の目的が、南部の奴隷制度を維持すると同時に、アメリカを「白人のアメリカ」として維持することにあつたことを見抜いていた。ゆえに、自由黒人を「アフリカへ送還」しようとするアメリカ植民協会の運動は、黒人の幸福のためではなく、白人の私利私欲のためだと見抜いていた。ウォーカーがアメリカ植民協会の運動に強烈に反発したのは、そのためであった²²⁾。

それにも増してウォーカーがアメリカ植民協会の運動に反発した理由は、ウォーカーがアメリカを「母国」だと考えていたからである。ウォーカーからすれば、「生まれ育った母国」から追放されるのだから、それに反発するのは当然であった。

22) ウォーカーは、アメリカから離れて移住することを希望する黒人は、「イギリス人の所」（シエラ・リオネ）か「われわれの兄弟であるハイチ人の所」へいくのがよいと言っている。アメリカの黒人たちを保護し、助けてくれるからだという（Walker 1975 [1829]: 88）。この発言から、ウォーカーが断固反対していたのは国外移住自体ではなく、アメリカ植民協会が勧める植民運動だったことがわかる。

われわれのうちの誰が家庭を離れてアフリカにいきたいだろうか。誰もそのようなことを欲していないと思う。[中略]。アメリカは白人のための国というよりは、われわれ（黒人）の国なのだ。われわれはこの国を、われわれの「血と涙」で豊かにしたからだ。アメリカ中の大いなる富は、すべてわれわれの血と涙によって得たものなのだ（Walker 1975 [1829]: 97）。

ウォーカーにとって、アメリカは黒人の血と涙で建設した、「黒人の国」であった。実際に黒人人口がはるかに上回る南部で生まれ育ったウォーカーにとって、その認識には現実味があるものだった。黒人の「血と涙」によって豊かにした、その「黒人の国」から、アメリカ植民協会は黒人たちを追放しようとしている。ウォーカーは次のように訴える（Walker 1975 [1829]: 97）。

この協会のすべての会員は、当然おるべき地、すなわち彼らの出生地から、黒人たちを追い出そうとする努力において、いわれのない不義と残酷を行使しているとみなされるべきである。

ウォーカーにとって、アメリカは黒人たちが「当然おるべき地、すなわち彼らの出生地」である。そこに住み続ける自由は「人としての当然の権利」であり、そこから黒人たちを追放しようとする白人たちの努力は、不当に「不義と残酷を行使している」とみなされるはずである。「尊厳をもって扱われる権利」、すなわち「自由・平等に扱われる権利」の意識が特に高い自由黒人にとって、彼らをアフリカへ強制的に送還しようとする計画は、「母国から追放する」という非人道的な迫害以外のなにものでもない。

それを国家的政策として進めようとするアメリカ植民協会の努力は、ウォーカーの「権利意識」をひどく侵害するものであったに違いない。

第5節 黒人革命への呼びかけ

1. 統合主義的側面

「権利意識のギャップ」を拡大させたウォーカーは、「わが黒人たちが、あなた方（白人）のある者をやがてこの地上から抹殺する日がくる」と宣言するほど急進化していく（Walker 1975 [1829]: 103）。あたかも、「デンマーク・ヴィシーの乱」の再来を予告しているかのようである。リチャード・アレンらが支持したエミグレーションという方法ではなく、アメリカ国内で暴力的に白人と対決していく姿勢を明らかにしていくのだ。その一方で、矛盾しているようだが、黒人が白人と和解し、アメリカで共に生きていく可能性にも言及している。ウォーカーは、白人たちに次のように訴えかける（Walker 1975 [1829]: 101）。

あなた方（白人）の恐れと偏見を取り除き、われわれを啓蒙教化し、われわれを人のように扱うがよい。そうすれば、われわれがあなた方を憎んでいる以上に、あなた方を好きになるのだ。

ウォーカーは、*Appeal* 第二章の「無知の結果に基づくわれわれの悲惨な状態」で、黒人たちがいかに無知で、啓蒙教育を必要としているかを説いた。黒人たちがアメリカ社会で自由と平等を勝ち取るには、黒人たちに読み書きを教え、啓蒙教育を施す以外に道はないと考えていた。しかし、南部の奴隷州では、奴隷黒人の教育を厳しく禁止していたので、「無知の

結果に基づく黒人たちの悲惨な状態」は続くのであった。ウォーカーからすれば、もし白人たちが奴隷黒人たちの啓蒙教育を手助けして、彼らを「人のように扱う」なら、「あなた方（白人）を好きになる」という可能性はあった。

黒人のアフリカ植民計画についても、「これ以上語るのをやめたまえ」と白人たちに訴えかける。

なぜならアメリカはあなた方の国であると同様に、われわれの国でもあるからだ。われわれを人のように扱うがよい。そうすれば、何の危険もなく、われわれは平和と幸福のうちに、ともに住むことができるのだ (Walker 1975 [1829]: 101-102)。

ウォーカーからすれば、もし白人たちが（奴隷黒人を含めた）黒人たちに十分な教育の機会を与え、「人」のように尊厳をもって扱うなら、黒人たちは進んで白人たちと「平和と幸福のうちに」、ともに生きていくことができると思えた。ウォーカーは、このように条件付きだが、黒人たちが「アメリカ人」として白人たちと共生してゆける可能性を示した。しかも、その可能性にかなりの期待を持っていたようにも思えることを述べている (Walker 1975 [1829]: 102)。

われわれを人のように扱うがよい。そうすればわれわれはあなた方の友になるのだ。過去のすべてが完全に赦され、神の助けのもとに、われわれが一致して幸いな民（原文は people）になれることについては、わたしはいささかの疑念もない。そのようなことは不可能だと白人はいうだろう。しかし神に不可能なことはないのだ。

ウォーカーは、「黒人たちを人のように扱う」よう、「白人ホスト社会の変革」を求めた。ヒンクスの言葉を借りれば、ウォーカーは「アメリカのネーションを刷新 (regenerate) することを望んだ」のだ (Hinks 2000: xxxi)。もし白人たちにそれができるようなら、ウォーカーの「権利意識のギャップ」は縮小し、「統合主義的」な立場から、「アメリカ人」として生きていくことを選ぶことができた。白人側が変革しさえすれば、ウォーカーはそれが可能だと考えたのだ。

ただし、「そのようなことは不可能だと白人はいうだろう」とウォーカー自身が認めるように、それはかなり難しいと認識していた。結局のところ、「あなた方が信じようが信じまいが、けっして悔い改めない人びと (白人) がこのアメリカ大陸にはいる」からである (Walker 1975 [1829]: 101)。最終的にウォーカーが達した結論は、黒人たちがアメリカで革命を起し、「黒人のアメリカ」を建設することであった。

2. 黒人革命——ハイチ革命の焼増し

Appeal の第四章「植民計画に基づくわれわれの悲惨な状態」の前半が、アメリカ植民協会を批判することを目的に書かれたことは、ここまで見てきたとおりである。その「付記」として書かれた後半は、黒人たちの「反抗精神」を喚起し、いわばハイチ革命で起きたような「黒人革命」を呼びかけることを目的にしている。ウォーカーは、「白人が正しかろうが悪かろうが、たちまち彼らに服従してしまう」黒人たちに対して、次のように訴えかける (Walker 1975 [1829]: 95)。

ああ、黒人同胞諸君よ、いつになったらわれわれは、この死人のような冷淡さを捨てることができるのか。勇気をもて、人らしくあれ、と
いいたい。

「黒人たちに勇気を与えることができれば、1人の有能な黒人の男が6人の白人を殺すことができる」、「12人の黒人に、戦いのためのよい準備をさせよう。そうすれば彼らは50人の白人を殺し、敗走させることができる」とウォーカーが *Appeal* の第2章で述べたように (Walker 1975 [1829]: 59)、ウォーカーは黒人の戦闘能力に関して大きな自信をもっていた。そして、一度戦いが始まれば、黒人たちは「大砲の口径に飛び込んで、土壌の成分である原子のような小片に碎かれることもいとわない」ほど勇敢であることも信じていた (Walker 1975 [1829]: 63)。ウォーカーからすれば、武装した黒人たちが一斉に蜂起するならば、少なくとも黒人が数で勝る南部では、白人たちを打ち負かすことが可能のように思えたのである。

ここで注目したいのは、黒人たちが武装蜂起し、白人たちを打ち破ったあと、黒人たちにどのような未来があるとウォーカーが思い描いていたかということである。ウォーカーは次のようにいう (Walker 1975 [1829]: 49)。

われわれの苦しみはまもなく終わるのだ。そのときわれわれは自分たちのなかに、あらゆる学識や才能、あるいは、たぶんもっと多くのものを得て、われわれ自身を治めることを欲するのだ。

白人たちに打ち勝った暁には、黒人たちは読み書き能力や啓蒙思想はもちろんのこと、さまざまな近代知識を学ぶであろう。そして注目すべきは、ウォーカーが、「われわれ自身を治める」(govern ourselves) ことを欲するであろうと言っていることである。この将来像は、まさにハイチ人がハイチ革命後に進めた近代的国家建設のそれである。ハイチ革命は、ウォー

カーにとってよいモデルだったのである。

ウォーカーからすれば、奴隷として連れてこられた黒人たちは、皆ハイチ人のように武装蜂起すべきであった。

西インド諸島のある島では、また南アメリカの大部分では、1人の白人に対して6人または8人の黒人がいる。なぜ彼らはこれらの場所を獲得しようとししないのだろうか (Walker 1975 [1829]: 96)。

「ハイチでできたのだから、他の場所でできないことはない」と言わんばかりである。ウォーカーからすれば、ハイチ人が少数の白人（フランス人）を軍事的に打ち負かし、「彼らの場所を獲得」したように、他の地域でも同じように黒人たちは蜂起すべきであった。「われわれの場所」を軍事的に獲得し、「われわれ自身を治める」という行為は、まさに「独立した権力を有し、自らを統治するピープル」、すなわち「主権的ピープル」または「ネーション」をイメージした行為であった。ウォーカーがそれをイメージしたのは、やはり「モデル」としてのハイチ革命の影響が大きいと言わざるをえない。

白人たちが打ち負かされたのち、黒人たちが「ブラック・ネーション」を建設するという将来像は、*Appeal* を出版する前年の1828年、MCGAで行ったスピーチの中でも表明されていた (Walker 2000 [1828]: 89)。

私は、神に感謝しなければいけない。今我々を苦しめている災難が、アフリカの息子たちにもはや降りかからない時がそんなに遠くない未来に来るであろうから。この天から祝福された約束は、次の世代で経験できないかもしれない。しかし、拒絶され、虐げられ、奴隷にされたアフリカの息子たちは、彼らの敵がまだいるにしても、地上のネー

ションの間で彼らの地位を確立するであろう。

ウォーカーが使ったこの「地上のネーションの間」(among the nations of the earth) という表現に含まれる「ネーション」は、ヨーロッパはもちろん、19世紀初頭に南米でも広まりつつあった「ネーションからなる世界」のそれを意味していると思われる。その「ネーションからなる世界」の中で、「彼らの地位を確立する」ということは、黒人たちが彼らのネーションを建設し、それを他のネーションから承認してもらおうということの意味する。現代でいえば、ユナイテッド・ネーションズ(国連)の加盟ネーションに、ひとつのネーションであることを承認してもらおうということと同じである。当時、ネーションまたは「主権的ピープル」は既に「世界モデル化」されつつあり、ウォーカーはその「ネーションからなる世界」の広まりを認識していた。ウォーカーが「アフリカの息子」たちの将来についてイメージしていたのは、その世界モデル化された「主権的ピープル」としてのネーションだったのだ²³⁾。

ハイチ革命に加え、アメリカ独立革命の影響も顕著である。*Appeal*の締めくくりでアメリカ独立革命のことを長々と述べていることを考えると、その影響の大きさが分かる。ウォーカーは、まず、「われわれは、自明の

23) ウォーカーが「アフリカの息子」たちをひとつのネーションとしてイメージしていた根拠は他にも多く上げることができる。例えば、*Appeal*の第三章「イエス・キリストの宗教の説教家に基づくわれわれの悲惨な状態」で、神の下で全ての人は平等であると訴えた際、神は「全てのネーション(all nations)、すなわちすべてのピープル(all people)に、父と子の聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施せ」と命じたウォーカーは述べた(Walker 1975 [1829]: 76)。このようにネーションとピープルを同意語として使ったすぐあとで、ウォーカーは、「われわれはひとつのピープルなのだ」

(We are a people) といって、他のネーション同様、平等に神の祝福を受ける権利を主張している。ウォーカーがアメリカ黒人たちを「ひとつのネーション」または「ひとつのピープル」としてイメージしていたことは間違いない。

真理として、すべての人は平等に造られ、創造主によって、一定の奪い難い天賦の権利が与えられ、そのなかに生命、自由および幸福の追求が含まれていることを信ずる」という有名な独立宣言の前文を引用し、「アメリカ人よ、あなた方のこの宣言を読むがよい」と訴えかける。そうした上で、前文のすぐあとに続く次の文言を引用する (Walker 1975 [1829]: 106)。

しかし暴虐と篡奪の事実が、明らかに一貫した目的のもとになされ、人びとを絶対的暴政のもとに圧倒しようとする計画を示すときには、そのような政府を廃棄し、彼らの将来の安全のために新たなる保障の組織を創設することは、彼らの権利であり、また義務でもある。

ウォーカーにとって、白人たちの「暴虐と篡奪の事実」は、明らかに一貫した目的のもとになされ、黒人たちを絶対的暴政のもとに圧倒しようとする計画」であった。ウォーカーが *Appeal* の中で長々と批判してきたアメリカの奴隷制度と、それを維持することを目的にしたアメリカ植民協会の「黒人送還運動」は、まさにそのような「計画」を表していた。ゆえに、黒人たちはアメリカ政府を「廃棄」し、「新たなる保障の組織」、すなわち彼らの自治政府を創設する権利と義務を有する。アメリカ独立革命の精神に従うなら、黒人たちは現政府を打倒し、「独立した権力を有し、自らを統治する」ための、彼らの自治政府を樹立する権利があるのだ。ウォーカーは、このことを訴えたいがために、わざわざ独立宣言を引用したのである。アメリカ独立革命は、ウォーカーにとってもっとも身近な、ひとつの「革命モデル」であった。ウォーカーが黒人をひとつの「主権的ピープル」としてイメージし、「黒人革命」を呼びかけた背景には、アメリカ独立革命の影響があったことは間違いない。

スタッキーによれば、ウォーカーが心に描いていたのは、「白人のアメ

リカ」の滅亡と、黒人たちがアメリカで政府を樹立する姿であった。それは、白人たちに対する「最後の審判」、黒人たちのための「新天新地の到来」を予言した、聖書の「黙示録的」(apocalyptic)なヴィジョンであった。そしてその中においては、「白人のアメリカ」の境界の中、もしくはそれに隣接したかたちで「黒人のアメリカ」が存在するという考えは含まれていない (Stuckey 1987: 147)。要するに、アメリカを完全に黒人の支配下に置き、そこに「ブラック・ネーション」を建設するというのである。ウォーカーのこうしたヴィジョンをみれば、たとえそれに現実味がなかったとしても、「ウォーカーが最初の本格的なブラック・ナショナリストだ」とスタッキーが主張したのも理解できよう (Stuckey 1972: 10; Asukile 1999: 18)。

最後にウォーカーのヴィジョンで言及しておきたいのは、その「汎アフリカニズム的」な側面である。ウォーカーはしばしば「アフリカの息子」(sons of Africa) や「アフリカの兄弟」(African brethren) という言葉を使う。多くの場合、それらは「アメリカの黒人」を指すが、「世界中の黒人」を指すこともある。例えば、ウォーカーは次のように言っている (Walker 1975 [1829]: 64-65)。

あなた方(黒人)の豊かな繁栄と幸福は、「世界中のすべての奴隷である兄弟たちが完全に解放されるまでは、けっして達成されないということが、「疑わしい」ことではなく、永遠に揺るぐことのない厳然たる事実である、とわたしはいいたい。〔中略〕。われわれの最大の幸福は、われわれ全体の救いのために労することであるとの主のみ心をわたしは信じる。

ここでウォーカーが言及している「兄弟」(brethren)は、その言葉の

とおり「世界中のすべての」黒人を指していることは明らかである。そしてそれが地球上のどこであっても、奴隷にされている彼らを解放しないかぎり、「われわれ全体」としての繁栄と幸福の達成はあり得ないと言っている。*Appeal* の正式タイトルは *Walker's Appeal, in Four Articles, Together with a Preamble, to the Colored Citizen of the World, but in Particular, and Very Expressly, to Those of the United States of America* である。このタイトルから、*Appeal* は、「世界中の黒人市民たち」(to the Colored Citizen of the World) に向けたものであったことが分かる。このように、ウォーカーのブラック・ナショナリズムは、そのタイトルからしても「汎アフリカニズム」的な要素を含んでいた。ただし、それが「特に、より明確に言えばアメリカ合衆国の黒人」(in Particular, and Very Expressly, to Those of the United States of America) に向けられたものであったことも間違いない。ウォーカーが *Appeal* を著した当時、アメリカでは奴隷貿易は法律上禁止されていたが、密貿易は続いていた。また、西インド諸島や南アメリカでは、奴隷貿易自体がまだ存続していた。そしてウォーカーは、アフリカで捕らえられ、西インド諸島や南アメリカへ奴隷として連れてこられた黒人たちの苦難を「他人事」だと考えていなかった。ウォーカーが「アフリカの息子」や「アフリカの兄弟」というとき、それは時として「アフリカに起源をもつ黒人全体」をイメージして使われていた。とはいえ、「ブラック・ネーション」を建設するヴィジョンをウォーカーが *Appeal* で示したとき、それは「全世界の黒人」ではなく、「アメリカの黒人」を対象としたものであったということは強調しておきたい。

第6節 ウォーカーの遺産

1830年6月28日、ウォーカーは *Appeal* の第3版を出版して間もなく死

亡する。遺体は彼が経営する古着屋の前で発見されたが、「死因は不明」である。しかし、ウィルツによれば、死因は毒殺によるものと思われ、「当時、黒人の自由のために最も雄弁に発言した代弁者が乱暴に殺された」と信じるものがほとんどだった。「ウォーカーの首に1,000ドルの賞金が懸けられた」との噂が南部から伝わってきていた上、友人たちがウォーカーにカナダへ避難するよう勧めていることから、実際に命が狙われていた可能性は高い (Wiltse: 1965: xi)。いずれにしても、*Appeal* の過激な内容から言って、ウォーカーをこの世から抹殺しようと考えた者がいたとしてもまったく不思議ではない。

ウォーカーの *Appeal* は、南部の主要な港から諸都市に持ち込まれ、白人たちを大いに警戒させた。*Appeal* は1829年9月に出版されたが、同年の12月にはジョージア州のサヴァンナで60部が押収されている。サヴァンナ市長はすぐにジョージア州知事にそのことを知らせ、より組織的な対処をするように要請している。その結果、すぐさま州法を成立させ、ジョージア州の港に入る黒人水夫を水際で検査し、治安を乱すような内容を含む書物を持ち込もうとする者は厳しく処罰することにした。ヴァージニア州のリッチモンドでも、自由黒人の水夫によって多数のコピーが持ち込まれ、地元の黒人たちの間で流布していた。サウスカロライナ州のチャールストンとルイジアナ州のニューオリンズでは、*Appeal* を流布したとして、何人もの黒人（奴隷黒人と自由黒人）が逮捕された。ウォーカーの故郷、ノースカロライナ州のウィルミントンでは、「州内で流布せよ」という指示とともに、ウォーカーからジャコブ・コワン (Jacob Cowan) と名乗る奴隷黒人に200部のコピーが送られた。ここでも多くの逮捕者を出し、その過程で何人かの黒人が市警に殺されている。1930年の前半には、南部の沿岸部諸都市は躍起になって *Appeal* の流布を食い止めようとしていた (Hinks 2000: xxxix; Mitchell 2002: 97-98)。本節でも見たように、南部

の諸都市では自由黒人の「黒人組織」や奴隷黒人をも巻き込んだ「黒人ネットワーク」ができており、それらを通じて *Appeal* は流通していったものと思われる。

Appeal は、黒人たちを「主権的ピープル」とイメージし、自らの統治単位を欲した点において紛れもなくナショナリズムのイデオロギーを包含していたが、その具体的な道筋やプログラムは述べられていなかった。また、ウォーカー自身がリーダーになって、実際に革命運動を引き起こそうという動きもなかった。ゆえに、*Appeal* が全米で流布したとしても、それに触発された黒人たちがまとまって、具体的にどこかで革命運動を引き起こそうということにはならなかった。その意味において、ウォーカーはナショナリストのリーダーではない。言ってみれば、ウォーカーは、ブラック・ナショナリズムのイデオロギーを黒人たちの間で広める「扇動者」であった。ウォーカーは、読み書きのできる黒人に向けて *Appeal* を書いているが、こうも言っている (Walker 1975 [1829]: 63)。

あまりにも無知なわれわれの兄弟たちは、この (*Appeal* の) 訴えを悟ることができない。それゆえに、あなた方の兄弟たちの悲惨さに目を向け、最善をつくして彼らに光を与えるように、とあなた方に訴えたいのだ。行ってあなた方の兄弟たちを啓蒙教化するように。

黒人たちの多く、特に南部の奴隷黒人たちは、「無知」で読み書きができず、*Appeal* で訴えていることを理解することができない。だから、読み書きができる「あなた方」は、それらの兄弟たちに理解させ、「啓蒙教化するように」努めてほしい。恐らくは、多くの場合読み聞かせるかたちを想定していたであろう。ウォーカーは、読み書きのできる黒人たちに「あなた方の前には偉大な働きがあるのだ」(There is a great work for

you to do) と訴え (Walker 1975 [1829]: 65)、*Appeal* の内容をもって「無知な黒人」たちを啓蒙するように扇動した。黒人たちが「独立した権力を有し、自らを統治する」という将来像をウォーカーが思い描いていたことは間違いないが、「デンマーク・ヴィシーの乱」での経験上、それが南部の一地方であったとしても、武力的に政府組織を圧倒することが難しいことは分かっていたはずである。ウォーカーからすれば、まずは全国の黒人たちを団結させ、革命精神を焚き付けることが先決と考えたのかもしれない。

ウォーカーの *Appeal* と、それに包含されるイデオロギーがその後のアメリカにどのような影響を与えたか、明確に答えることは難しい。しかし、*Appeal* が流通した時代は、アメリカの反奴隷制度運動がそれまでの「穏やかな説得」(gentle persuasion) から「戦闘的改革運動」(militant crusade) へと変容していった時代であった (Wiltse 1965: xi)。1829年にルイジアナ州で数回の暴動が報告されているし、1830年にはノースカロライナ州で「奴隷がほとんど手に負えない」ようになったとして州議会に援助を要請している (Franklin 1978: 161)。また、1831年1月にウィリアム・ロイド・ガリソンがフレデリック・ダグラスと共に発刊した *Liberator* は、ウォーカーの *Appeal* を公然と肯定し、その大部分を掲載した (Wiltse 1965: xi)。そして同年八月、ヴァージニア州サウザンプトンで、かの有名な「ナット・ターナーの乱」が起きた²⁴⁾。「南部の人々がウォーカーと

24) ヴァージニア州サウザンプトン出身の奴隷、ナット・ターナー (Nat Turner) は、1831年8月、主人のジョセフ・トラヴィスとその家族を殺害し、多くの奴隷を巻き込んで暴動を起し、次々と60人もの白人たちを殺害した。最終的に、反乱を起こした黒人の主力は州と連邦の軍隊と衝突し、鎮圧された。この衝突で100人以上の奴隷黒人が戦闘で死亡し、その直後に13人の奴隷黒人と3人の自由黒人が絞首刑に処せられた。ターナーは10月に捕まり、11月に処刑された。この「ナット・ターナーの乱」は、「白人が何百人も殺された」と誇張されて伝えられたこともあり、「南部は完全に茫然たる状態と

ギャリソン（ガリソン）のいわゆる『扇動的』著述を、ナット・ターナーやその他の反乱と結びつけたのは、あまり不思議ではない」とフランクリンが言うように（Franklin 1978: 161）、確かにウォーカーの *Appeal* は、黒人たちの「反乱精神」を掻き立て、黒人が白人かを問わず反奴隷制度運動を推し進める勢力に勢いを与えたひとつの原因だったといえよう。ただし、強調しておかなければならないのは、ウォーカーの *Appeal* が、プロテスタント系キリスト教、啓蒙思想、アメリカ独立革命などに由来する、いわば「アメリカの伝統」ともいえるイデオロギーの影響を受け、その発展の中で現れたということである。

参考文献

日本語文献

原百年（2016）「アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源」山梨学院大学『法学論集』77号。

原百年（2018）「アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源（2）—理論枠組みと仮設—」山梨学院大学『法学論集』81号。

原百年（2021）「アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源（3）—ピルグリム・ファーザーズから独立革命まで—」山梨学院大学『法学論集』87号。

原百年（2022）「アメリカにおけるブラック・ナショナリズムの源（4）—ブラック・ナショナリズムの先駆者：リチャード・アレン—」山梨学院大学『法学論集』88・89合併号。

クォールズ・ベンジャミン（1994）明石紀雄他訳『アメリカ黒人の歴史』明石出版＝Quarles, Benjamin. (1987 [1964]) *The Negro in the Making of America*, 3rd edition, New York: Macmillan Publishing Company.

フランクリン・ジョン・ホープ（1978）井出義光他訳『アメリカ黒人の歴史—奴隷から自由へ』研究社出版＝Franklin, John H. (1974) *From Slavery to Freedom: A History of Negro Americans*, New York: Alfred A. Knopf, Inc.

英語文献

Asukile, Thabiti (1999) “The All –Embracing Black Nationalist Theories of David なった」(Franklin 1978: 161)。

- Walker's Appeal", *The Black Scholar*, Vol. 29, No. 4, 16-24.
- Bacon, Jacqueline. (2007) *Freedom's Journal: The First African American Newspaper*, Lanham: Lexington Books.
- Bracks, Lean'tin. (2012) *African American Almanac: 400 Years of Triumph, Courage and Excellence*, Detroit: Visible Ink.
- Franklin, John H. (1974) *From Slavery to Freedom: A History of Negro Americans*, New York: Alfred A. Knopf, Inc. (井出義光他訳『アメリカ黒人の歴史—奴隷から自由へ』研究社出版、1978年).
- Garnet, Henry H. (2007 [1848]) *Walker's Appeal, with a Brief Sketch of His Life, by Henry Highland Garnet, and Also Garnet's Address to the Slaves of the United States of America*, UK: Dodo Press.
- Hall, Prince. (2001 [1797]) 'A Charge', in Newman, Richard S. (ed.) *Pamphlets of Protest: An Anthology of Early African American Protest Literature, 1790-1860*, London: Routledge, 45-50.
- Hinks, Peter P. (1997) *To Awaken My Afflicted Brethren: David Walker and the Problem of Antebellum Slave Resistance*, Pennsylvania: Pennsylvania State University Press.
- Hinks, Peter P. (2000) 'Introduction' in Peter Hinks (ed.) *David Walker's Appeal to The Colored Citizens of the World, Pennsylvania*: Pennsylvania State University Press.
- Jaynes, Gerald D. (ed.) (2005) *Encyclopedia of African American Society*, London: Sage Publications.
- Jefferson, Thomas. (1975 [1782]) *Notes on the State of Virginia*. (中屋健一訳『ヴァージニア覚え書』岩波文庫、1975年)
- Newman, Richard S. (2008) *Freedom's Prophet, Bishop Richard Allen, the AME Church, and the Black Founding Fathers*, New York: New York University Press.
- Raboteau, Alberto J. (1995) *A Fire in the Bones: Reflections on African-American Religious History*, Boston: Beacon Press.
- Robertson, David. (1999) *Denmark Vesey: The Buried Story of America's Largest Slave Rebellion and the Man Who Led it*, New York: Vintage Books.
- Stuckey, Sterling. (1972) *The Ideological Origins of Black Nationalism*, Boston: Beacon Press.
- Stuckey, Sterling. (1987) *Slave Culture: Nationalist Theory and the Foundations of Black America*, Oxford: Oxford University Press.
- Thompson, C. Bradley. (2004) *Antislavery Political Writings, 1833-1860*, New York:

M. E. Sharpe, Inc.

Walker, David. (1829) *Walker's Appeal, in Four Articles, Together with a Preamble to the Colored Citizens of the World, but in Particular, and Very Expressly to Those of the Unites States of America*. (山形正男訳「ウォーカーの訴え」『黒人論集』研究社、1975年)

Wesley, Charles H. (1968) *In Freedom's Footsteps: From the African Background to the Civil War*, New York: Publishers Company, Inc.

Wiltse, Charles M. (1965) *David Walker's Appeal: To the Colored Citizens of the World, but in particular, and very expressly, to those of The United States of America*, New York: Hill and Wang.